村 下 遺 跡 Ⅱ

－Ｃ地点の調査－

大野城市文化財調査報告書

―　第91集　―

2010

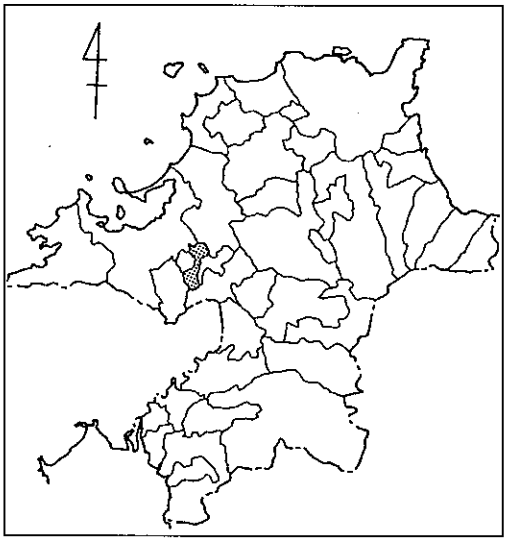
大 野 城 市 教 育 委 員 会

村下（むらした）遺跡 Ⅱ

―Ｃ地点の調査―

大野城市文化財調査報告書

―　第91集　―



2010

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角に位置し、市名の由来となった大野城跡をはじめ水城跡や牛頸須恵器窯跡などの国指定史跡を始めとして数多くの文化財に恵まれた街です。本市教育委員会では開発に先立って発掘調査を実施していますが、今回ご報告する村下遺跡は市の北部の市街地で発見された遺跡です。当初は主に弥生時代の集落に関係する遺構が確認されていましたが、３回目の調査地点であるＣ地点で古墳時代初めの土器や遺構が見つかり、長く人の住んでいたことが判明しました。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、さまざまな形で活用されることを願っております。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対してご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成２２年３月３１日

大野城市教育委員会
教育長　古賀　宮太

例　　言

１．本書は、大野城市教育委員会が実施した、村下遺跡Ｃ地点の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、共同住宅建設に伴って実施したものである。

３．当遺跡出土遺物の整理及び報告書作成業務は、入札によって株式会社タクトに委託し、執筆の一部（「Ⅰ．はじめに」）を大野城市教育委員会　舟山良一が担当した。業務全体についての検査は舟山・石川健が行った。

４．報告書作成における業務分担は、次のとおりである。

・遺物実測：森田レイ子、松本理栄子
・デジタルトレース：松本
・遺物写真：小島理美、岡紀久夫（監修）
・執筆：岡本格、森田
・編集：松本、森田

５．遺構実測図中の方位は、磁北を表す。

６．本文中での出土遺物量の表現は、20cm × 30cm のビニール袋と 40cm×60.5cm×15cm の整理用コンテナを基準に換算した。

７．本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の１地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。

８．遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器で、断面斜線は石製品である。

９．本書に関わる遺物・図面・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．位置と環境……3
Ⅲ．調査の結果
　　１　調査概要……6
　　２　遺構と遺物……6
　村下遺跡Ｃ地点出土の土器に付着する赤色顔料について……23
Ⅳ．まとめ……31

表　目　次

表１　　出土遺物観察表……26～30

図版目次

図版１　（１）調査前　全景（東から）
　　（２）調査区北半（南東から）
図版２　（１）ＳＤ01　完掘状況（南東から）
　　（２）調査区南半（北西から）
図版３　（１）ＳＤ01北西部
　　（２）ＳＤ01土層
図版４　（１）ＳＫ13（北から）
　　（２）ＳＫ15・16（西から）
図版５　　出土遺物①
図版６　　出土遺物②
図版７　　出土遺物③
図版８　　出土遺物④

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
第２図　村下遺跡Ａ～Ｊ地点位置図(1/5,000) …… 4
第３図　村下遺跡Ｃ地点　遺構配置図（1/200）…… 5
第４図　ＳＫ12　出土遺物実測図（1/3）　…… 6
第５図　ＳＫ13　実測図（1/40）…… 7
第６図　ＳＫ13　出土遺物実測図（1/3）…… 8
第７図　ＳＫ16　実測図（1/40）…… 9
第８図　ＳＫ16　出土遺物実測図①（1/3）…… 10
第９図　ＳＫ16　出土遺物実測図②（1/3）…… 11
第10図　ＳＫ16　出土遺物実測図③（1/4）…… 11
第11図　ＳＤ01　土層断面図（1/30）…… 12
第12図　ＳＤ01-Ⅰ層　出土遺物実測図（1/3）…… 13
第13図　ＳＤ01-Ⅱ層　出土遺物実測図（1/3）…… 14
第14図　ＳＤ02　出土遺物実測図（1/3）…… 16
第15図　ＳＤ07　出土遺物実測図（1/3）…… 17
第16図　ＳＤ09～14　出土遺物実測図（1/3）　…… 18
第17図　ＳＤ15　出土遺物実測図①（1/3）…… 19
第18図　ＳＤ15　出土遺物実測図②（1/3）…… 20
第19図　包含層出土遺物実測図（1/3）…… 21
第20図～第24図…… 25

Ⅰ．はじめに

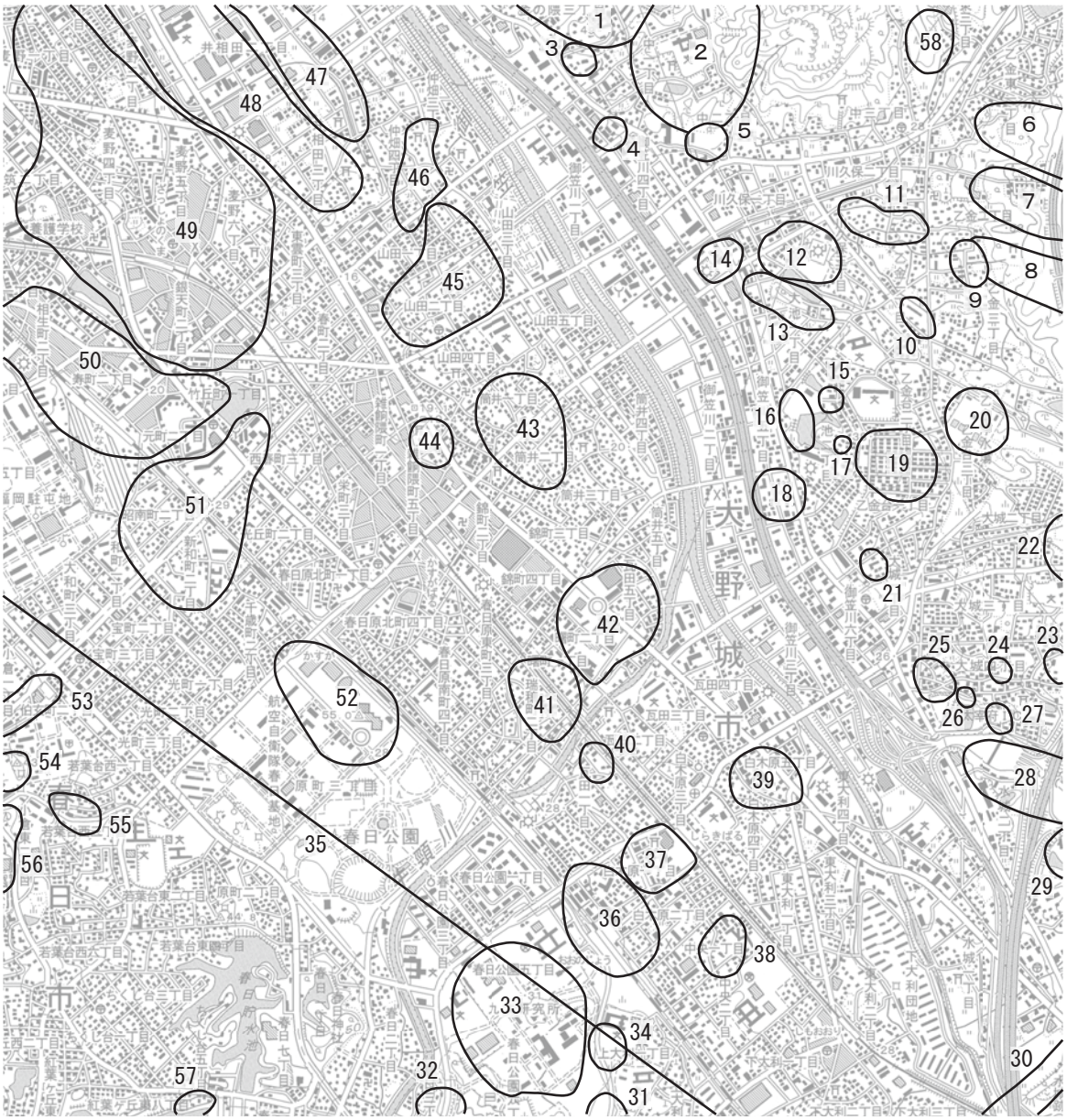
村下遺跡は1987年（昭和62）に共同住宅建設のため試掘調査を実施したところ見つかった遺跡である。その後2008年（平成20）まで10回（Ａ～Ｊ地点）の発掘調査を行ったが、今回報告するのはＣ地点の調査についてである。Ｃ地点の発掘調査は1992年（平成４）７～９月に行い、面積は約600㎡であった。

発掘調査は技師向直也を中心にして実施したが、整理作業は2009年（平成21年度）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	古賀　宮太
	教育部長	森岡　勉
	ふるさと文化財課長	舟山　良一
	文化財担当係長	中山　宏
	主査	徳本　洋一
	〃	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	主任技師	林　　潤也
	〃	早瀬　賢
	技師	上田　龍児
	嘱託	石川　健
	〃	大里　弥生
	〃	中島　圭
	〃	吉田　浩之
	〃	下高　大輔（9月まで）
	〃	井上絵美子
	〃	早瀬　遼子
	〃	境　　聡子

本市教育委員会では、発掘調査を担当した技師の退職等により報告書の刊行が遅れている発掘調査成果の公表については、平成18年度より順番を決めて業者委託により年次的に刊行する方針で臨んでいるが、本報告書がその４冊目になる。業者は専門業者による入札によって決定しているが、今回は株式会社タクトが落札したことから、同社に委託した。報告書掲載遺物の選択や実測図・原稿等の検査は本市教育委員会が行い作成した。

発掘調査に際しては、調査費用のご負担をいただいた地権者をはじめ、ご協力を得た地元の方々ならびに関係各機関に厚く感謝の意を表します。



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

１. 持田ケ浦古墳群	２. 御陵古墳群	３. 今里不動古墳	４. 塚口遺跡
５. 御陵前ノ椽遺跡	６. 喜一田古墳群	７. 王城山古墳群	８. 古野古墳群
９. 花園遺跡	10. 薬師ノ森遺跡	11. 松葉園遺跡	12. 森園遺跡
13. 中・寺尾遺跡	14. ヒケシマ遺跡	15. 平隈遺跡	16. ウド遺跡
17. ウド古墳	18. 榎町遺跡	19. 銀山遺跡	20. 原口古墳群
21. 原門遺跡	22. 雉子ケ尾遺跡群	23. 曲目遺跡	24. 深町古墳
25. 金山遺跡	26. 金山古墳	27. 笹原古墳	28. 成屋形遺跡
29. 裏ノ田遺跡	30. 水城跡	31. 池ノ上遺跡	32. 向谷北遺跡
33. 九州大学構内遺跡	34. 池田遺跡	35. 官道推定ライン	36. 御供田遺跡
37. 後原遺跡	38. ハザコ遺跡	39. 原ノ畑遺跡	40. 国分田遺跡
41. 瑞穂遺跡	42. 石勺遺跡	**43. 村下遺跡**	44. 雑餉隈遺跡
45. 御笠の森遺跡	46. 川原遺跡	47. 仲島遺跡	48. 井相田遺跡群
49. 麦野遺跡群	50. 南八幡遺跡群	51. 雑餉隈遺跡群	52. 駿河遺跡
53. 伯玄社遺跡	54. ナライ遺跡	55. 西平塚遺跡	56. 高辻遺跡
57. 惣利窯跡群	58. 唐山古墳群		

Ⅱ．位置と環境

大野城市は東に三郡山地、西に脊振山地を控えた福岡平野の東南部に位置している。市域は南北に長く、中央部がくびれた形である。福岡平野の主要河川の一つである御笠川が、市の北部を南東から北西へ向かって流れている。御笠川は宝満山に源を発し、博多湾に注ぐ二級河川であり、支流には牛頸山を源とする牛頸川などがあり御笠川、牛頸川がつくる沖積平野が発達している。

村下遺跡Ｃ地点は大野城市筒井町１丁目 470 に所在し、御笠川左岸の沖積平野に立地している。村下遺跡は現在までに 10 回（Ａ～Ｊ地点）の発掘調査が行われており、その結果弥生時代を中心として、古墳時代から鎌倉時代、江戸時代などの遺構や遺物が確認されている。今回報告するＣ地点は弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良・平安時代の遺構や遺物が検出された遺跡である。ここでは大野城市内を中心に当該時期の遺跡について概観する。

弥生時代後期の遺跡には、集落に仲島遺跡（47）、墓地では雑餉隈（ざっしょのくま）遺跡（44）、遺物が確認された遺跡に石勺遺跡（42）、榎町遺跡（18）があり、市外では春日市に集落遺跡の駿河遺跡（52）がある。このうち仲島遺跡は弥生から奈良時代、石勺遺跡は縄文から近世に及ぶ遺跡であり、後述する古墳時代前期、奈良・平安時代の遺構や遺物も検出されている。仲島遺跡からは中国新時代の貨幣である貨布や、人面墨書土器が出土している。

古墳時代前期の遺跡には、集落に瑞穂遺跡（41）、外来系の土器がまとまって出土した原の畑遺跡（39）などがあり、墓地では前期の古墳が持田ヶ浦古墳群（1）、御陵古墳群（2）で確認されており、御陵古墳群周辺で発見されたとの伝承を持つ三角神獣鏡が現存している。

奈良時代の集落遺跡には前述の石勺遺跡や仲島遺跡、仲島遺跡の西に隣接する福岡市の井相田遺跡、掲載地図の範囲外になるが須恵器窯跡で有名な牛頸窯跡群内の塚原遺跡や日の浦遺跡などがある。村下遺跡の南東約 2.7 ㎞には水城跡（30）があり、西門から鴻臚館まで直線的に延びると推定されている官道跡（35）と考えられる遺跡に池田遺跡（34）、春日市の九州大学構内遺跡（33）、掲載地図外の谷川遺跡がある。村下遺跡から官道推定ラインまでの距離は最短で約 1.5㎞である。

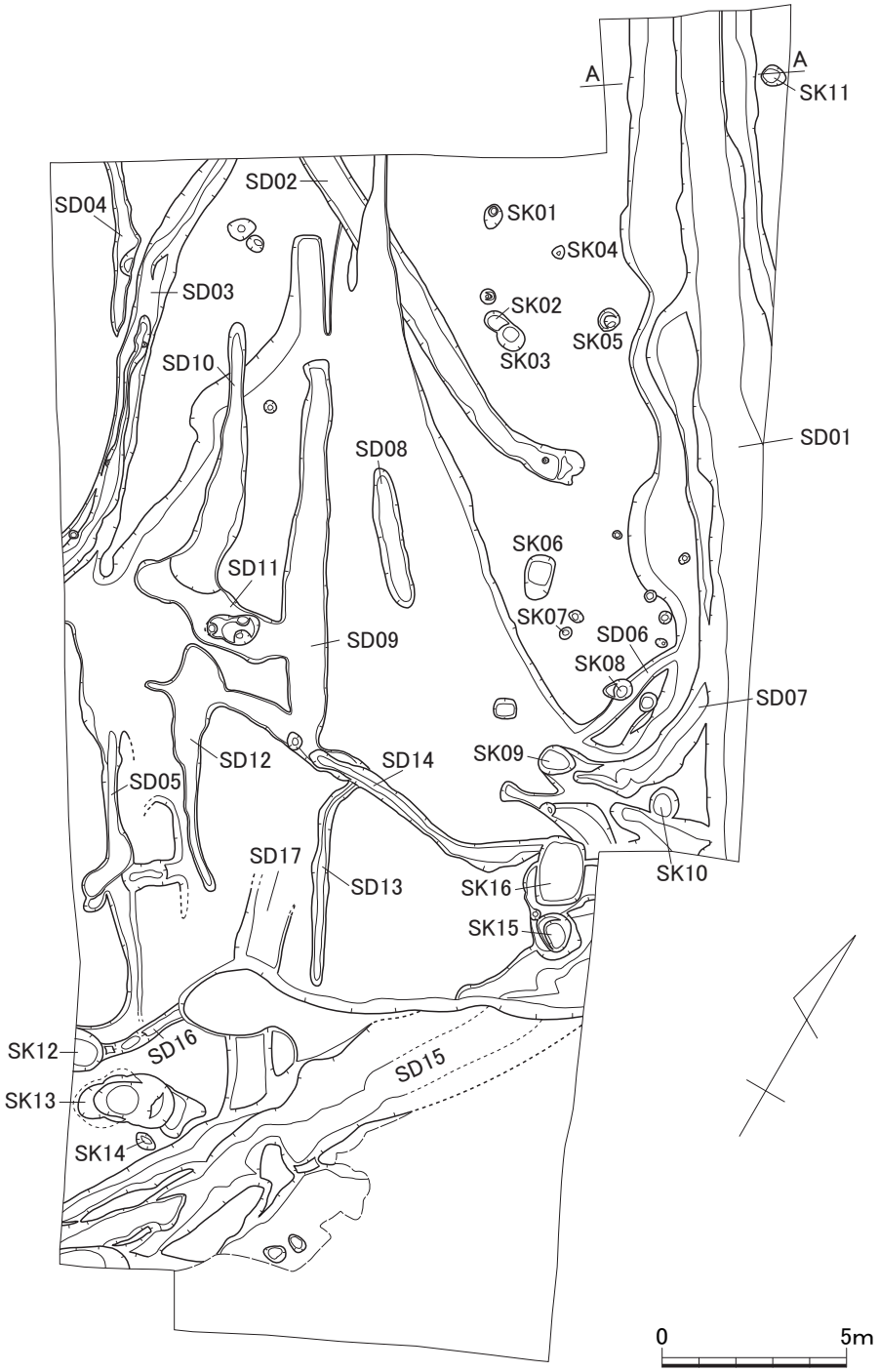
平安時代の遺跡には、墓地の森園遺跡（12）、塚口遺跡（4）、白磁がまとまって出土した溝が検出された松葉園遺跡（11）などがある。

参考文献

『大野城市史　上巻　』 大野城市史編さん委員会　2005

地点名	調査次数	調査年月
A地点	1	1987(S62) 4 ～ 5
B 地点	2	1990(H2) 7
C 地点	3	1992(H4) 7 ～ 9
D 地点	4	1995(H7) 4 ～ 5
E 地点	5	1996(H8) 5
F 地点	6	2000(H12) 11 ～ 2001(H13) 1
G 地点	7	2001(H13) 7 ～ 8
H 地点	8	2002(H14) 4 ～ 6
I 地点	9	2005(H18) 1 ～ 2
J 地点	10	2008(H20) 12

第２図　村下遺跡Ａ～Ｊ地点位置図 (1/5,000)



第３図　村下遺跡Ｃ地点　遺構配置図 (1/200)

Ⅲ．調査の結果

1　調査概要

村下遺跡C地点は大野城市筒井1丁目470に所在する。調査面積は600㎡で、検出された主な遺構は土坑と溝である。土坑は16基、溝は17条に遺構番号をつけて報告するが、報告にあたって、調査時から変更したものがあり、変更の内容はその都度説明する。遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良から平安時代に属するものが中心である。

2　遺構と遺物

ｉ．土坑

ＳＫ06（第３図）

調査区の中央から北よりに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は上端で1.24×0.77ｍ、深さ44㎝である。出土遺物には土器片が35点あるが､ほとんどが胴部片であり時期は判然としない。

ＳＫ12（第３図）

調査区の南側に位置し、遺構の南西側は調査区境界外に出る。ＳＤ16と切り合い関係になるか不明である。平面形は円形か楕円形になると思われ、上端規模は0.77+α×1.17+α ｍ、深さは90㎝である。

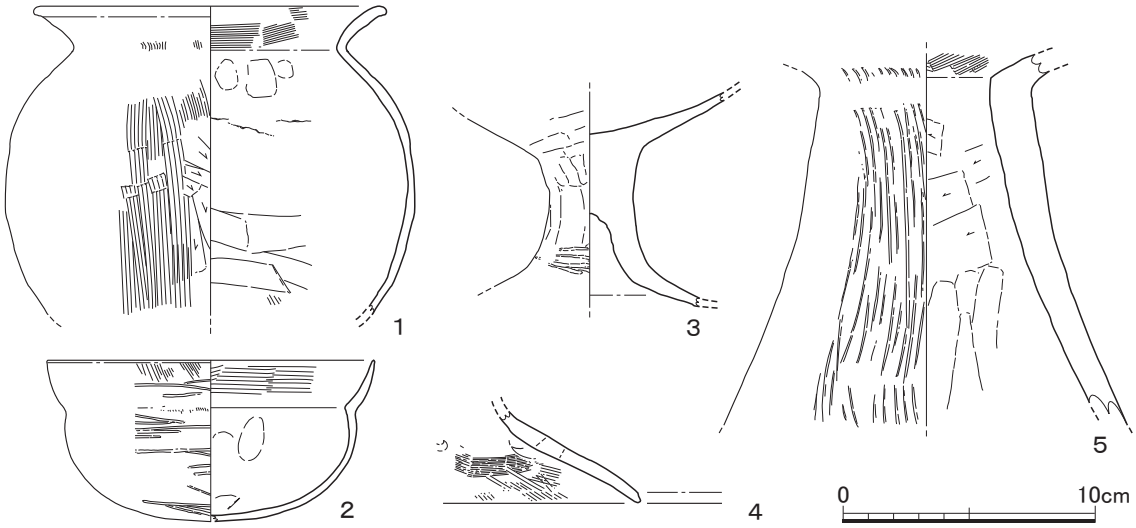
出土遺物にはビニール袋2袋分の土器がある。古式土師器以外の土器は出土していないと思われる。個体数では在地系土器の方が多いが、他の遺構などに比べて畿内系土器の割合が高い。

出土遺物　（第４図、図版５）

土師器

甕（1）　口縁部は外湾しながらきつく外反し、端部は丸くおさめる。内面の調整はハケメで外面はヨコナデである。胴部外面はヘラケズリ後ハケメ、内面はナデで上位に指頭痕が残る。

鉢（2）　小型丸底の鉢で、口縁部は内湾している。外面は口縁部にハケメが残るが、その後全体に、



第4図　SK12　出土遺物実測図(1/3)

磨耗のため不明瞭だがヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部がハケメ、胴部がナデで指頭痕が残る。

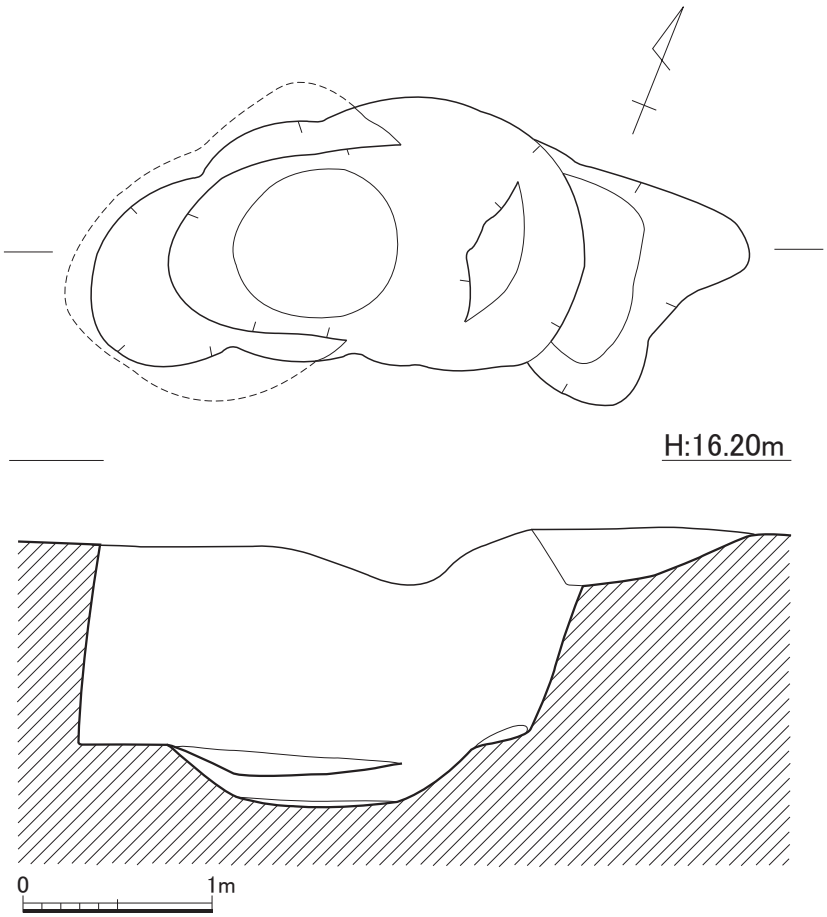
高杯（３・４）　３は杯部下位から脚部が残り、裾部は欠損する。杯部内面は磨耗気味だがミガキ調整と思われ、外面は全体にナデである。４は裾部片である。外面はナデ、内面はハケメ調整で、円形の透かし穴をもつ。外面に赤色顔料を塗布する。

器台（５）　受部端と裾部をともに欠損するが径の 1/3 程残存する。外面はハケメ、内面は受部がハケメ、胴部上位がヘラケズリで下位はナデ調整である。

ＳＫ 13（第５図、図版４）

ＳＫ 12 の東に位置する。平面形は不整形であり、複数の土坑が切り合うのかもしれない。西側の壁はオーバーハングしてテラスをもち、東側にも２段のテラスがある。規模は上端で3.44×1.42m、深さは 148 ㎝である。

出土遺物には整理箱２箱分の土器がある。須恵器の甕胴部片が数点あるが、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土器が中心で、ほとんどが在地系の土器だと思われる。実測図は土師器として掲載している。

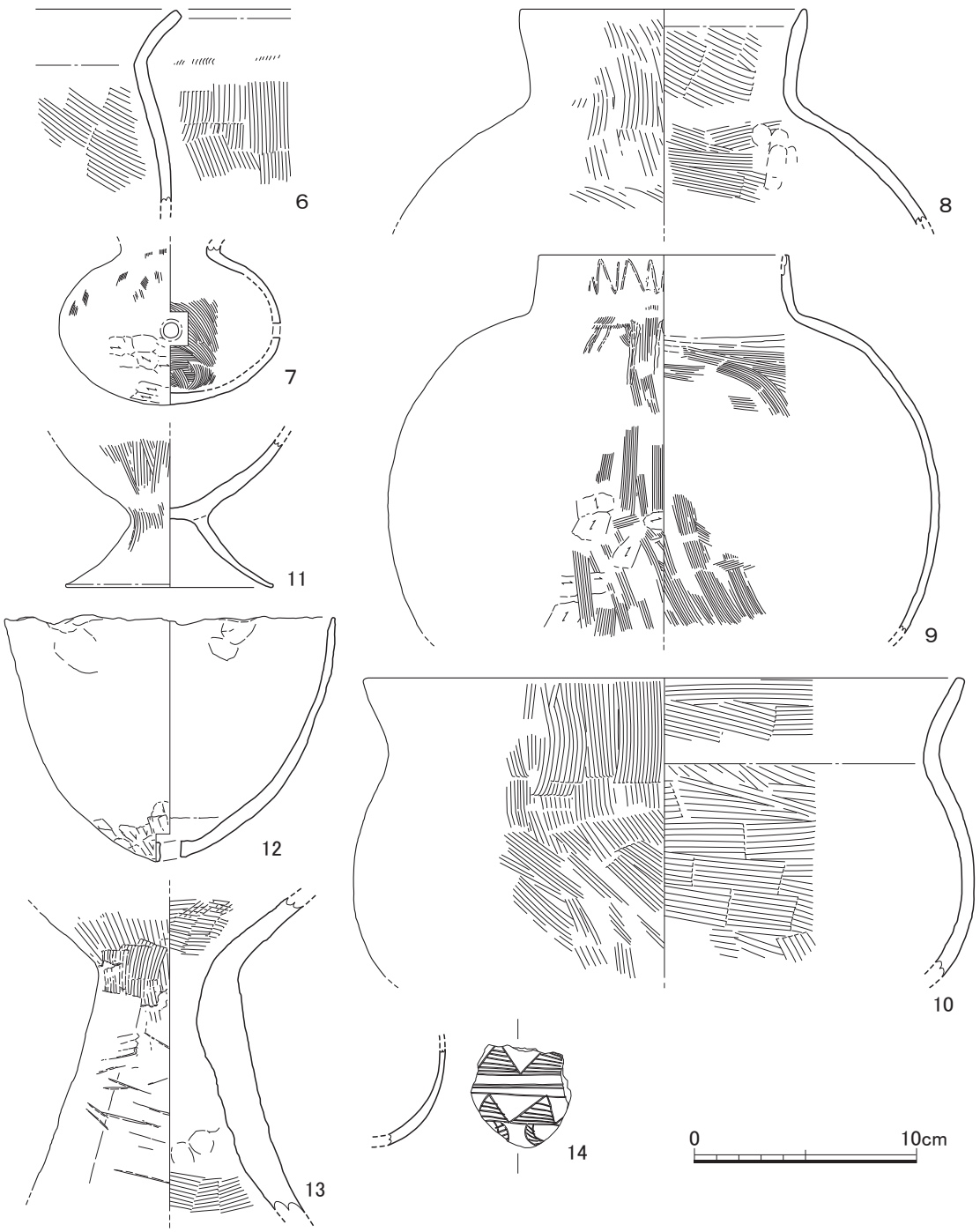


第5図　SK13　実測図(1/40)

出土遺物（第６図、図版５）

土師器

甕（６）　口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は内外面ともにハケメ調整である。



第6図　SK13　出土遺物実測図(1/3)

壺（７～９）　**7**は頸部のすぼまった小型丸底の壺で、胴部中央に穿孔が一つある。口縁部は欠損するが胴部はすべて残存する。外面は下半がヘラケズリ、上半がハケメ後ナデと思われる。内面は上位がナデでそれ以下はハケメ調整である。**8**は直口壺で口縁端部を尖り気味に仕上げている。内外面ともにハケメ調整であるが、胴部内面はその後部分的にナデている。**9**も直口壺である。口縁部外面はヨコナデの後、暗文で一条の波状文を施し、内面は摩耗で不明瞭である。胴部外面はヘラケズリ後ハケメで、その後に一部ヘラミガキを施す。内面はハケメ調整である。

鉢（10・11）　**10**は大型の鉢で口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケメ調整である。**11**は台付き鉢だと思われるが、甕かもしれない。鉢部は外面がハケメ、内面はナデ。脚台部は外面の一

部にハケメが残るが他は磨耗で不明瞭。

甑（12）　底部は尖り底であり穿孔が一つある。底部外面はヘラケズリ、その他は内外面ともにナデ調整である。口縁部は波打ち、この部分はやや雑なつくりである。

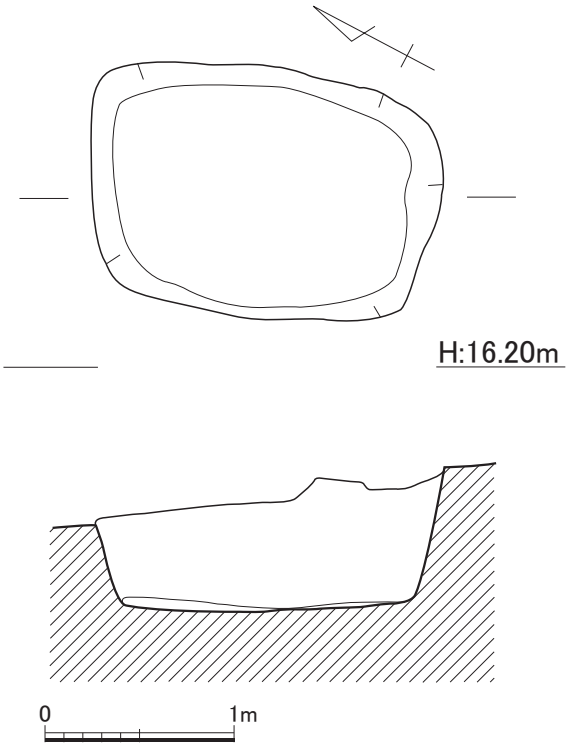
器台（13）　受部端と裾部端はすべて欠損する。受部は内外面ともにハケメ。胴部外面はナデで、工具を押し付けたような痕がある。内面は裾端部に近い方はハケメ、それより上位はナデ調整である。

器種不明品（14）　胴部下位から底部付近と想定して図化している。内面はナデ調整で、外面は丁寧なナデかミガキ調整と思われ、黒塗りを施しているようである。外面には鋭利な工具による細線の線刻文様がある。現状では三本の沈線を間に挟んで上下二段に鋸歯文を描き、下段の鋸歯文の下に別の模様を描いている。この模様については、中途で欠損しており全体の形状はわからないが、二本の弧状の沈線の間を短い沈線で埋めたものであり、二本の沈線の曲がり方からすれば半円状のものが連続する形になるのかもしれない。鋸歯文の三角形内部は平行な沈線で埋めている。

ＳＫ 16（第７図、図版４）

調査区の東側に位置し、ＳＤ 14 と切り合うが先後関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、上端規模は 1.85 × 1.34 m、深さは 81 ㎝である。床面はほぼ平坦である。

遺物は整理箱 2 箱分出土している。ほとんどが弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器と思われるが、図化遺物以外に弥生時代後期前半に遡ると思われる甕底部片も出土している。すべて在地系土器で外来系土器は出土していないと思われる。実測図は弥生土器として掲載している。石製品は大型の砥石（28）のみである。



第7図　SK16　実測図(1/40)

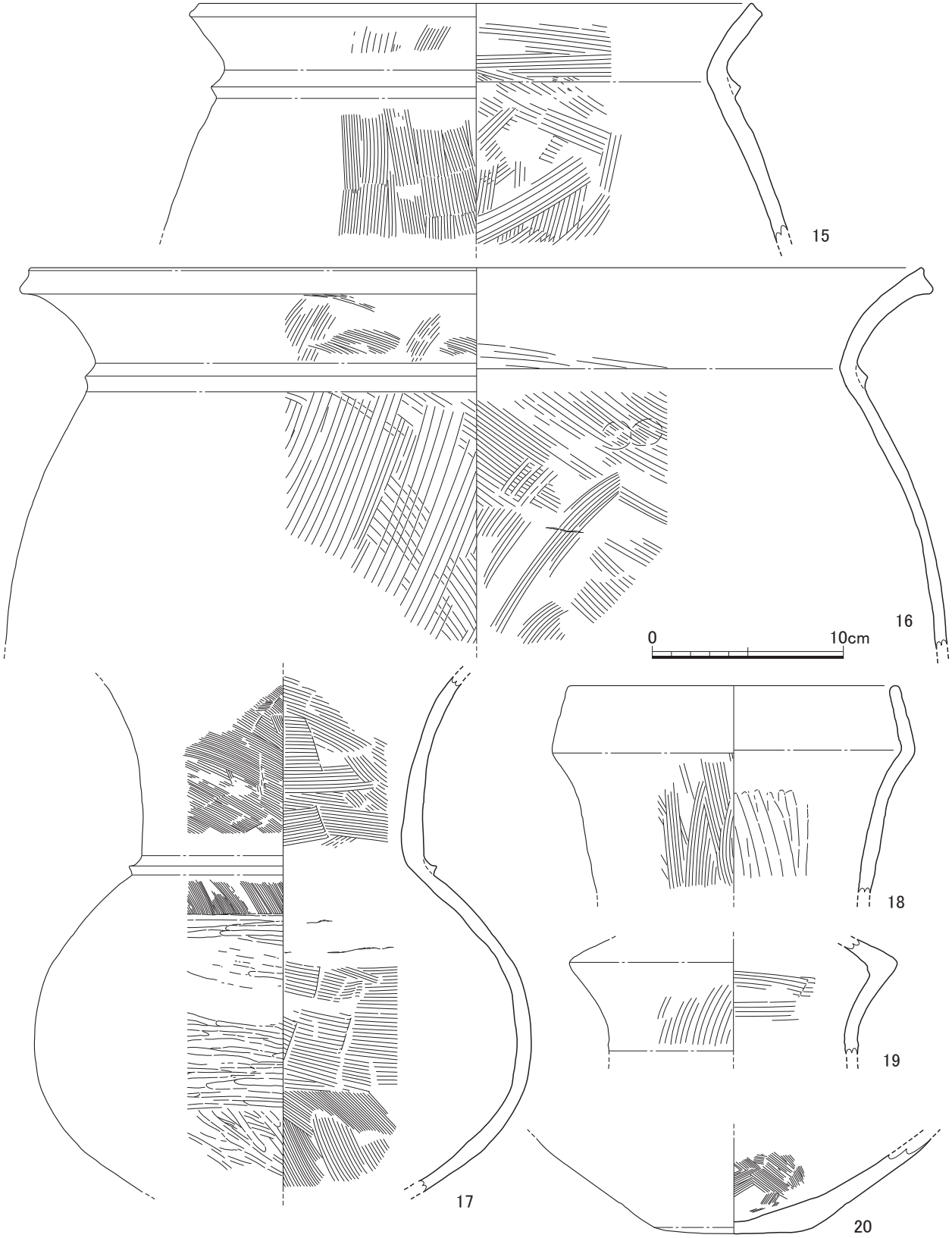
出土遺物（第８・９・10 図、図版５・６）

弥生土器

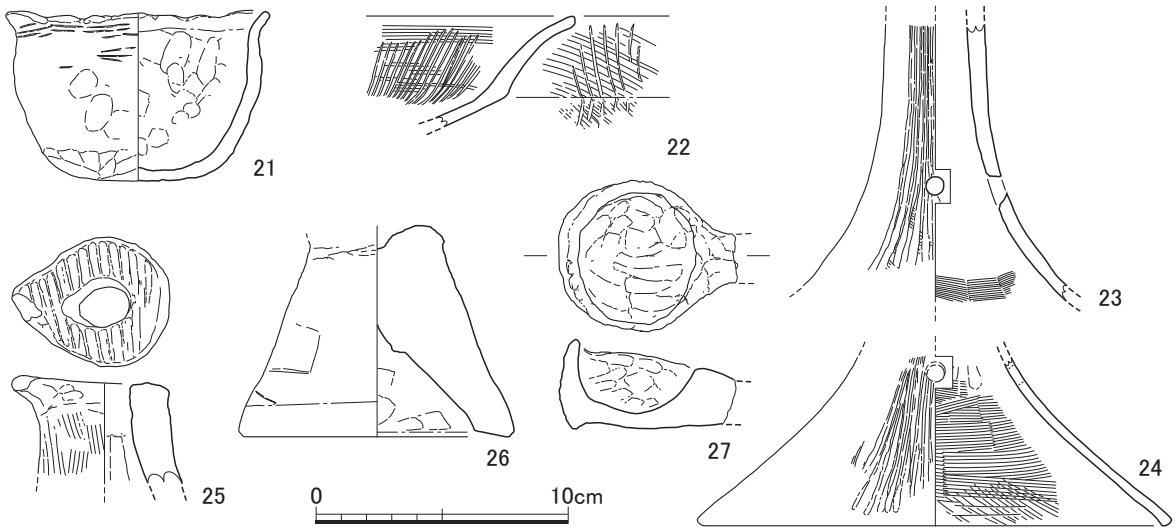
甕（15・16）　15 は頸部に三角突帯を貼り付けている。内外面ともにハケメ調整である。16 も頸部に三角突帯を貼り付けている。口縁部は外湾して立ち上がり、端面は強くナデて凹ませている。口縁部の調整は内外面ともにハケメ後ヨコナデ、胴部外面はハケメで内面はハケメ後ナデ調整である。

壺（17 ～ 20）　17 は口縁部と底部を欠損する。頸部は緩やかに外湾しながら外上方にのび、基部に三角突帯を貼り付け、胴部はやや扁平な球形である。頸部の調整は内外面ともにハケメ、胴部外面はハケメの後、下位にナナメ方向のヘラミガキを、その後中位から上位にヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は上位がナデ、中位から下位がハケメであり、外面のヘラミガキの方向が変わるライ

ンの裏側あたりで、ハケメの方向も変化する。ハケメ原体も下位の方が条痕幅が狭い。18 は複合口縁壺の口縁部で口縁反転部の屈曲が緩いものである。口縁部外面はハケメ、他はナデ調整であるが頸部内面はナデの単位が明瞭に残る。19 も複合口縁壺の口縁部で、端部は欠損する。頸部外面



第8図　SK16　出土遺物実測図①(1/3)



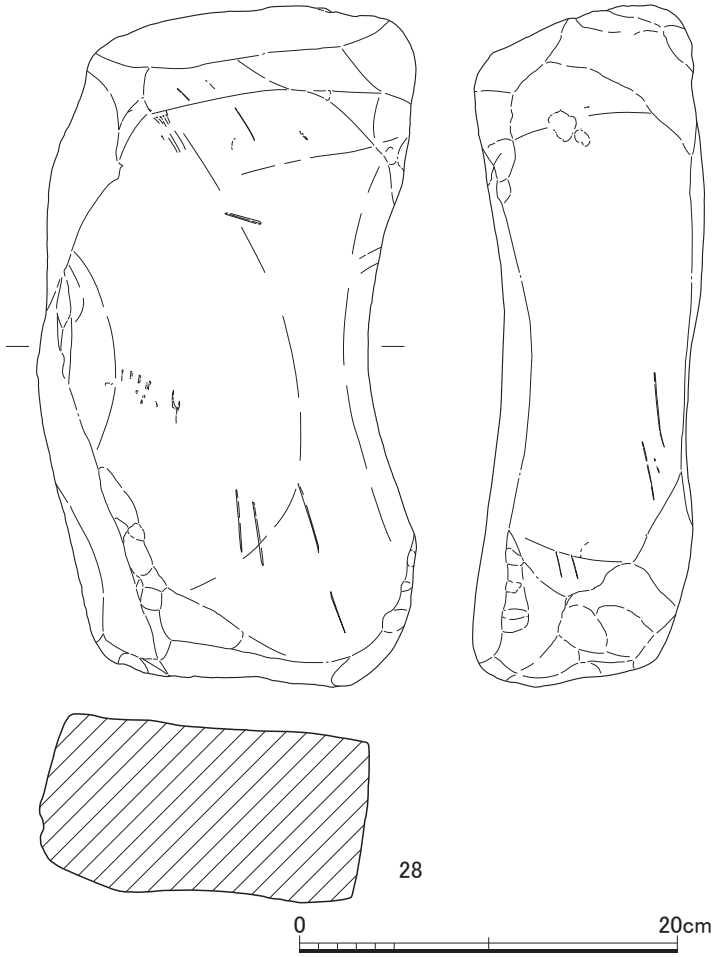
第9図　SK16　出土遺物実測図②(1/3)

はハケメ後ナデで内面はハケメ、反転部から上位は内外面ともにナデ調整である。**20** は凸レンズ状の平底で外面はナデ、内面はハケメ調整である。

鉢（21）　不安定な丸底の鉢で口縁部は外反する。調整は内外面ともにナデで指頭痕が残るが、口縁部付近には工具痕があり、外面底部はヘラ状工具によるナデであろうか。

高杯（22 ～ 24）　**22** は杯部小片で、内外面ともにハケメの後タテ方向に暗文を施す。**23** は脚部で裾端部を欠損する。4 箇所に円形の透かしがあり、調整は、外面がハケメの後タテ方向のヘラミガキ、内面は裾端部に近い方がハケメで他はナデ。**24** は裾部片である。透かしは円形のものが一つ残るのみで全体の数はわからない。外面はハケメのちタテ方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整である。

支脚（25・26）　**25** は沓形支脚で上部のみ残る。穿孔はかなり大きなものである。上面が平行タタキ、外面は指頭痕を残すナデにより突起部をもつ上部を整え、それより下位



第10図　SK16　出土遺物実測図③(1/4)

はハケメ、内面はナデ調整である。26 も沓形支脚かもしれないが 2/5 程度しか残存しておらず判然としない。上部は中央付近で凹ましているが穿孔があるものか不明である。内外面ともにナデ調整である。

土製品

柄杓（27） 柄をほとんど欠損する。内外面ともにナデ調整である。

石製品

砥石（28） 長さ 30.0 ㎝、重さ 12.1 ㎏の大きなものである。砂岩製と思われる。実測図上の表面と裏面、右側面の三面を使用する。

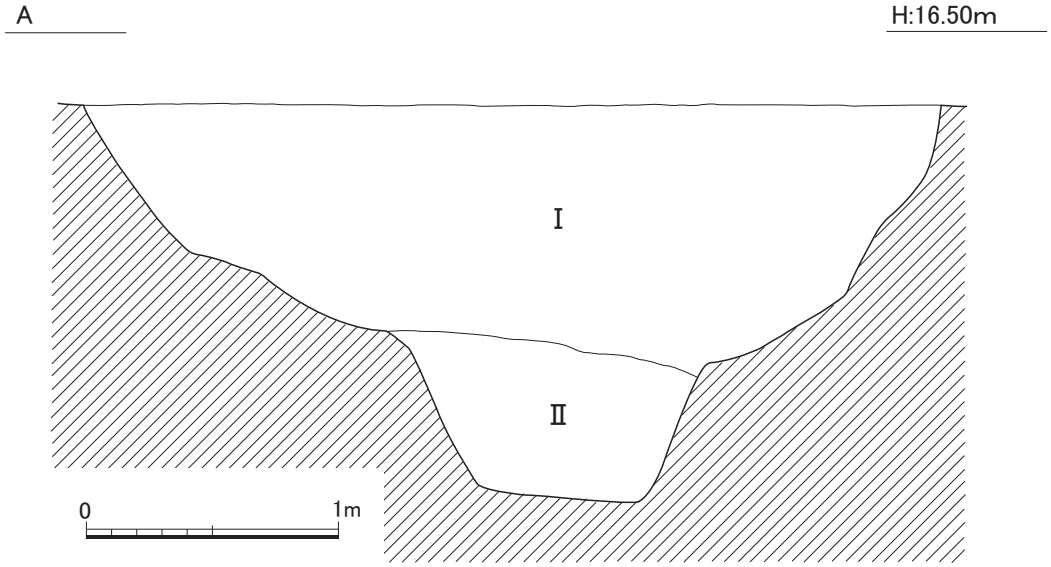
ⅱ．溝

溝は 17 条に遺構番号をつけて報告する。そのうちＳＤ 09 からＳＤ 14 までは、調査時にはひとまとめにＳＸ 02 として記録されていたものであり、報告にあたって変更した。

ＳＤ 01（第 11 図、図版２・３）

調査区の北東側に位置する。南東から北西に延び、両端とも調査区外へ続く。ＳＤ６・7 と切り合い関係になるかは不明である。断面形は北西部で二段掘り、中央付近では片側が調査区外のため不明だが、さらにテラスがある。幅は 3.38 ～ 3.96 ｍ、深さは最深部で 182 ㎝である。この溝は直線的に延びるのに加え形態にも規格性が窺えるため人工的な溝としてよいだろう。水路としての利用があったかは痕跡が不明なためわからないが、区画溝としての機能は考えてよいように思う。北西側と南東側の床面の比高差は 27 ㎝で北西側が低いが、もっともレベルが低いのは中央付近で南東側との比高差は 39 ㎝である。

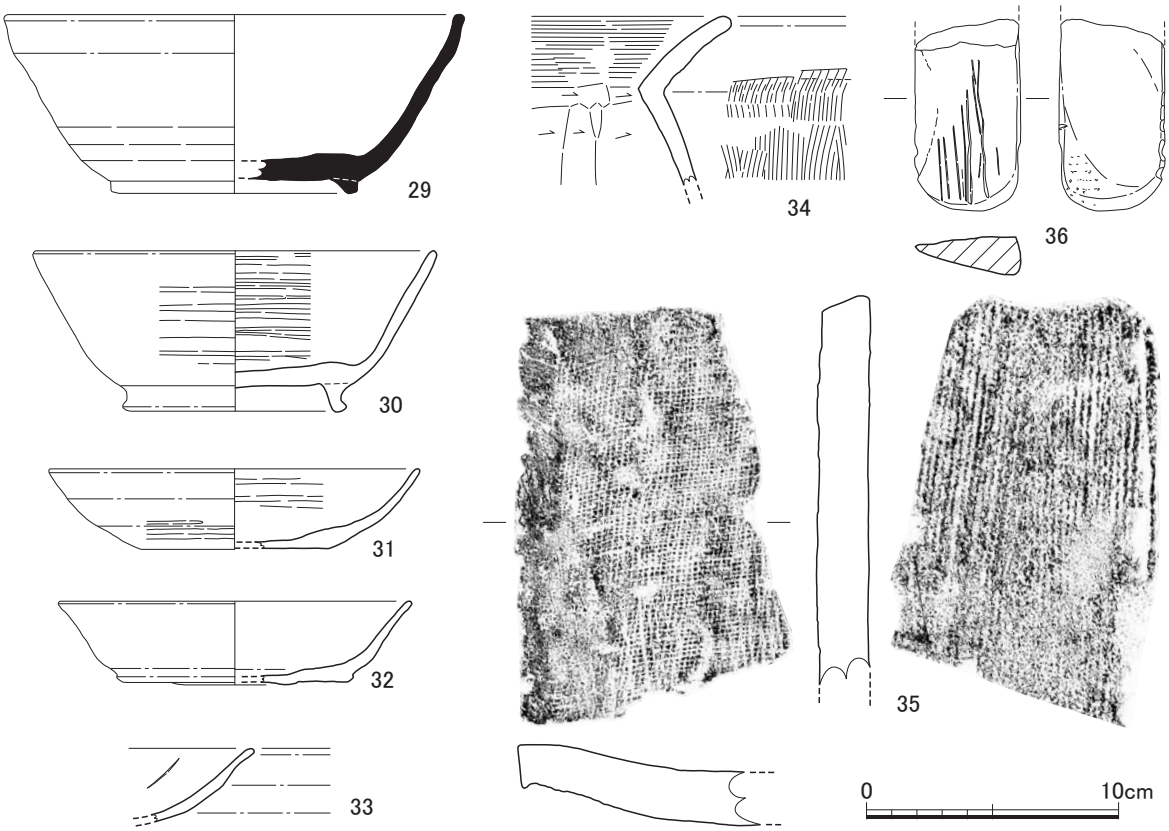
土層は 2 層に分けられ、遺物はⅠ・Ⅱ層ともに整理箱 2 箱ずつ出土している。他の遺構と比べれば古代の土師器・須恵器がかなり多く含まれる。それ以外の土器は弥生時代後期から古墳時代初頭のものであり、ほとんどが在地系で畿内系を少し含んでいる。他には古代の丸瓦と平瓦があり、石



Ⅰ： **黒褐色土**（所々に少量の砂が混じる）

Ⅱ： **砂混じりの黒褐色土**（やや粘質、Ⅰ層よりもかなり砂量が多い）

第11図 SD01 土層断面図(1/30)



第12図　SD01-Ⅰ層　出土遺物実測図(1/3)

製品には図化したもの以外に黒曜石のチップ、砥石片が出土している。Ⅰ層とⅡ層の土器の時期に大きな差はないようである。

Ⅰ層出土遺物（第 12 図、図版６）

須恵器

杯(29)　高台付きの杯である。調整は､体部は内外面ともに回転ナデで外面下位を回転ヘラケズリ、底部内面は回転ナデ後不定方向ナデ、底部外面は回転ヘラケズリで、高台には板状圧痕がある。

土師器

杯（30 ～ 32）　**30** は高台付きの杯である。底部内面と体部内外面にナデの後ヨコ方向のヘラミガキを施し、切りはなしは回転ヘラ切りである。**31** も底部内面と体部内外面にナデの後ヨコ方向のヘラミガキを施す。底部外面は回転ヘラケズリ調整である。**32** は内外面ともにヨコナデ調整で、切りはなしは回転ヘラ切りである。板状圧痕がある。

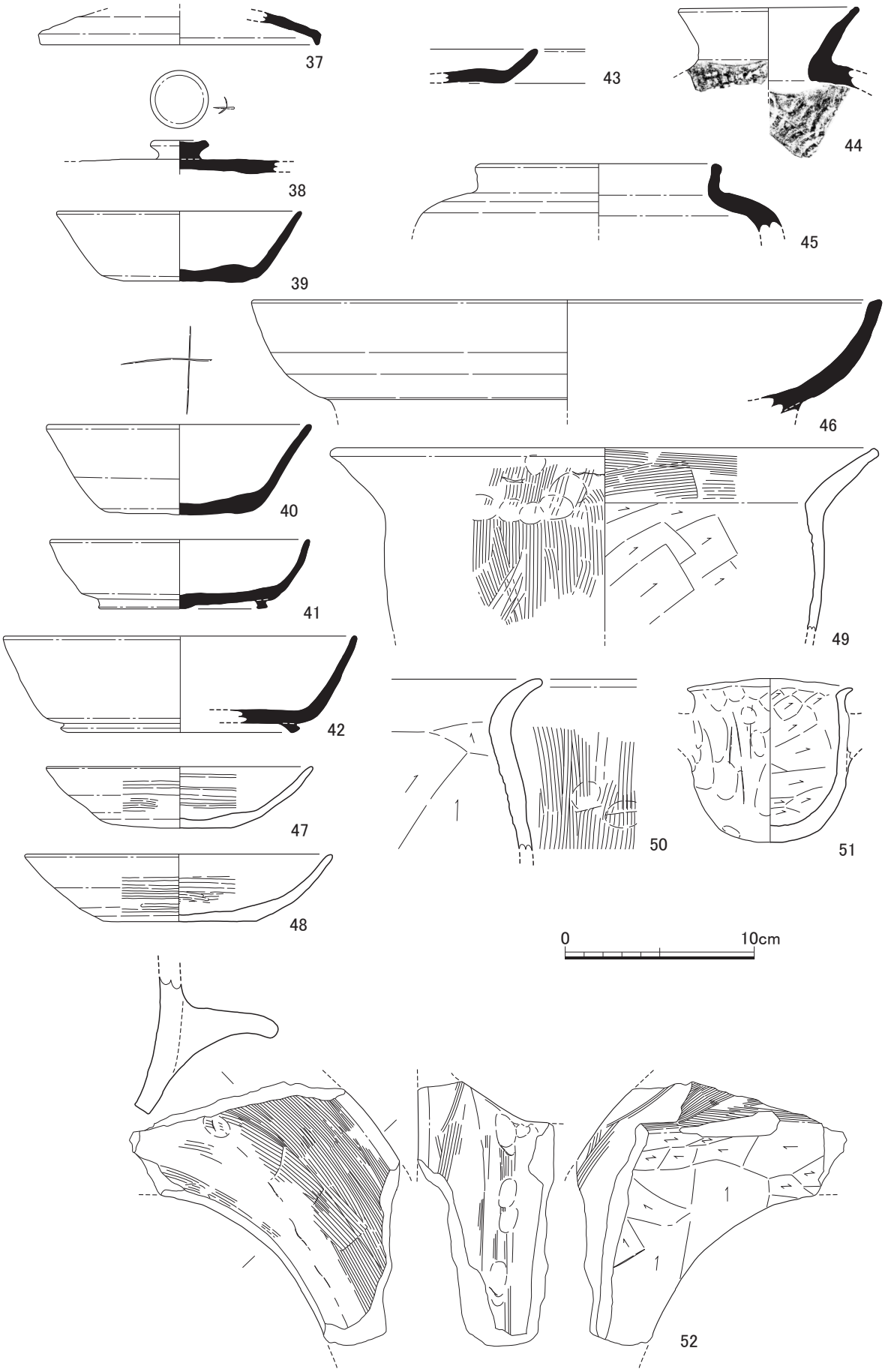
丸底杯（33）　口縁部から底部付近までを残す小破片である。調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面はナデで不明瞭な指頭痕を残す。内面はコテ当て痕を残すミガキである。

甕（34）　口縁部片から胴部上位の小破片である。調整は、体部内面がヘラケズリ、外面がハケメで口縁部に少しくいこむ。口縁部内面はハケメ、外面はヨコナデ。

瓦

平瓦（35）　須恵質焼成の破片である。突面は縄目タタキ、凹面に布目痕を残す。

石製品



第13図　SD01-Ⅱ層　出土遺物実測図(1/3)

不明石製品（36）　図上右側の面が平滑なのに比べて、左側は破断面と思われる状態なのだが、一概に傷ともいえない溝状の掘り込みがある。

　他に図版写真のみ掲載した土器がある（図版８）。弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の壺の頸部である。頂部の丸い三角突帯を頸部に貼り付けているが、貼り付け前のハケメ調整が良くわかるので掲載した。

Ⅱ層出土遺物（第 13 図、図版６・７）

須恵器

蓋（37・38）　**37** は杯蓋である。口縁から天井部の一部が残存する。調整は、口縁部が回転ナデ、天井部は外面が回転ヘラケズリで、内面が回転ナデ後一部不定方向ナデ。**38** は壺蓋であろうか。つまみと天井部の一部が残存する。調整は、つまみ部が回転ナデで、天井部外面が回転ヘラケズリ、内面がナデ。天井部外面のつまみ付近に線刻があり、ヘラ記号の可能性がある。

杯（39 ～ 42）　**39** は色調と焼成は土師質であるが、須恵器と思われる。口縁部を少し欠損するがほぼ完形である。調整は、体部が内外面ともに回転ナデ、底部内面は磨耗により不明瞭である。底部の切りはなしは回転ヘラ切りで、その後ナデ。板状圧痕がある。**40** も色調と焼成は土師質であるが、須恵器と思われる。調整は、体部の内外面がヨコナデ、底部内面はヨコナデ後不定方向ナデ。底部内面にはヘラ記号と思われる線刻がある。底部の切りはなしは回転ヘラ切りで、その後ナデ。板状圧痕がある。**41** は高台付きの杯である。調整は、底部内面が回転ナデ後不定方向ナデ。体部は内面が回転ナデ、外面は回転ナデ後一部にタテ・ナナメ方向のナデ。底部は回転ヘラ切りで切りはなした後にナデ。**42** も高台付きの杯である。調整は、体部が内外面ともに回転ナデ、底部内面は回転ナデ後一部に不定方向ナデ。

皿（43）　色調と焼成は土師質であるが、須恵器である。調整は、体部が内外面ともに回転ナデ、底部内面はナデ。底部は回転ヘラ切りで切りはなした後にナデ。板状圧痕がある。

横瓶（44）　口縁から胴部上位が残存する横瓶と思われる。胴部は格子目タタキで調整され、内面に同心円あて具痕が残る。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整である。

短頸壺（45）　口縁から胴部上位の破片で、瓦質の焼成である。胴部外面が回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ調整である。

盤（46）　瓦質の焼成で、高台付きの盤だと思われるが、高台はほとんど欠損する。体部は内湾しながら立ちあがる。調整は、底部内面がナデ、体部は内外面ともに回転ナデだが、外面下位は回転ヘラケズリである。

土師器

杯（47・48）　**47** と **48** は法量が違うが、いずれも同様の調整である。底部から体部下位は回転ヘラケズリで、それ以外はヨコナデの後ヨコ方向のヘラミガキを施す。ともに口縁部に煤が付着しており灯明皿としての使用が考えられる。

甕（49・50）　**49** の外面と口縁部内面はハケメで、その後口縁端部はヨコナデで仕上げる。胴部内面はヘラケズリ調整である。口縁部には特に内面で広範囲に煤が付着する。**50** は胴部の内面がヘラケズリで外面がハケメ、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。

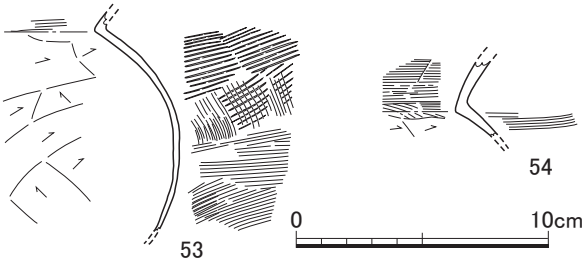
鉢（51）　把手付きのもので、全体の 1/2 程度の残存である。把手の剥離痕が一箇所あるが、両側に付くかどうかはわからない。口縁部は短く、きつく外反させる。内外面ともにナデ調整で外面には広く煤が付着する。

移動式竈（52）　天井から庇部の破片だと思われる。展開した図の左側が焚き口を正面から見た図である。内面がヘラケズリされ、庇部は内面がハケメで外面はハケメ後ナデ調整である。庇部の内面には煤が付着する。

ＳＤ 02（第３図）

調査区の北西側に位置する。東南東から西北西に延び、西北西側は調査区外へ続く。幅は 63 ～ 94 ㎝、深さは最深 34 ㎝である。床面のレベルにはかなりばらつきがある。包含層を掘削した際の落ち込みと思われるものと切り合うが、実測図では切りあい関係が混乱している。

遺物には整理箱 1 箱分の土器がある。弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものであり、ほとんどが在地系であるが少し畿内系のものを含む。図化した土器は庄内系の甕である。



第14図　SD02　出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 14 図、図版７）

土師器

甕（53・54）　**53** は口縁部をほとんど欠損する胴部片である。器壁は薄く仕上げられている。調整は、外面が右上がりの細かい平行タタキの後ハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部はほとんど残っていないが、内面はハケメだと思われる。**54** は口縁端部を欠損する小破片である。胴部は外面がやや細かい平行タタキで内面はヘラケズリ、口縁部は外面がヨコナデで内面はハケメ調整である。

ＳＤ 03（第３図）

調査区の北西側に位置する。南から北に延び両端とも調査区外に続く。南側は二段掘りになっている。幅は 69 ～ 116 ㎝、深さは最深 43 ㎝である。床面のレベルは二段掘り部も一段掘り部も南側が高い。

遺物はビニール袋 1 袋分の土器が出土している。古代の土師器と須恵器、胴部小片ばかりで判然としないが弥生時代後期から古墳時代初頭の土器も含まれると思われる。

ＳＤ 04（第３図）

調査区の北西側、ＳＤ 03 の西に位置する。南東から北西に延び、北西側は調査区外に続く。幅は 36 ～ 69 ㎝、深さは最深 20 ㎝である。床面のレベルは南東側が高い。溝内に深さ 10 ㎝の掘り込みが一つある。

遺物には須恵器片と土師器片が 2 点ずつある。

ＳＤ 05（第３図）

実測図からは３条の流れがあるように見えるが、調査時の遺構番号のまま報告する。溝の北西側、南東側、北東側は先端が両側に開くような状況になっている。床面のレベルは北西側からの流れが南側に屈曲する部分が一番低く、深さは 35 ㎝である。

遺物には土師器片・須恵器片・青磁片が 45 点ある。

ＳＤ 06（第３図）

調査区の東側に位置し、ＳＫ 08 に切られる。幅は 40 ～ 54 ㎝、深さは最深 17 ㎝である。床面のレベルは北側が高い。遺物は出土していない。

ＳＤ 07（第３図）

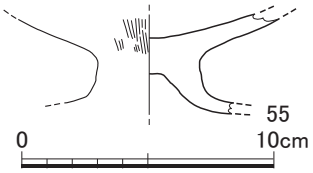
調査区の東側に位置する。幅は 31 ～ 101 ㎝、深さは最深 30 ㎝で床面のレベルにはかなりばらつきがある。

遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器片が 56 点出土している。

出土遺物（第 15 図）

土師器

台付き鉢（55）　杯部と裾部を欠損するが、台付き鉢だと思われる。全体に磨耗するが、脚台部内面はナデ、他はミガキ調整だと思われる。杯部外面にはミガキの前のハケメが残る。



第15図　SD07　出土遺物実測図（1/3）

ＳＤ 08（第３図）

調査区中央のやや北西よりに位置する。北西から南東に延び、幅は 53 ～ 73 ㎝、深さは最深 9 ㎝で、床面のレベルは北西側が高い。遺物は出土していない。

ＳＤ 09（第３図）

調査区中央のやや北西よりに位置する。ＳＤ 11・14 と合流する。北西から南東に延び、幅は 53 ～ 122 ㎝、深さは最深 12 ㎝で床面のレベルは北西側が高い。

ＳＤ 10（第３図）

ＳＤ 09 の北西側に位置し、緩く南側に湾曲する。ＳＤ 11 と合流し、幅は 35 ～ 128、深さは最深 31 ㎝で床面のレベルは北西側が高い。

ＳＤ 11（第３図）

ＳＤ 9・10 と合流する。西から東に延び、幅は 100 ～ 150 ㎝程、深さは最深 7 ㎝で床面のレベルは西側が高い。床面に性格不明の落ち込みがある。

ＳＤ 12（第３図）

ＳＤ 14 と合流する。南東から北西に延び、幅は 23 ～ 150 ㎝程、深さは最深 7 ㎝で床面のレベルは南東側が高い。

ＳＤ 13（第３図）

ＳＤ 14 と合流する。南東から北西に延び、北側に屈曲してＳＤ 14 にぶつかる。幅は 24 ～ 46 ㎝、深さは最深 8 ㎝で床面のレベルは南東側が高い。

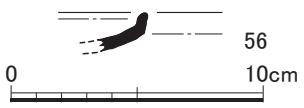
ＳＤ 14（第３図）

ＳＤ 09・12・13 と合流する。ＳＫ 16 と切り合うが先後関係は不明である。西から東に延び東側で北東に湾曲してＳＫ 16 と切り合う。幅は 23 ～ 80 ㎝程、深さは最深 27 ㎝で中央付近の一段下がる部分が最も深い。他の部分ではほとんど 5 ㎝未満の深さである。床面のレベルにはばらつきがあ

る。

ＳＤ 09 ～ 14 出土遺物（第 16 図）

前述のとおり調査時点ではＳＤ 09 からＳＤ 14 までをまとめてＳＸ 02 としているため、それぞれの遺物がどの遺構にともなうか不明である。ビニール袋 1 袋分の土器が出土している。古代の土師器・須恵器と、ほとんど胴部片で時期は判然としないが弥生時代後期から古墳時代初頭の土器も含むと思われる。



第16図　SD09～14　出土遺物実測図(1/3)

須恵器

高杯（56）　口縁部の小破片である。内外面ともに回転ナデ調整である。

ＳＤ 15（第３図）

調査時にはＳＸ 04 となっていたもので報告にあたって変更した。調査区の南東に位置し、未掘部分がある。ＳＫ 15 と切り合うが先後関係は不明であり、ＳＤ 17 と切り合い関係になるか不明である。北東から南西に延び、両方とも調査区外に続く。遺構の形状は平断面ともに整ったものではないが、深さは最深 83 ㎝程ある。この遺構から南東側はほとんど未掘である。

遺物は整理箱 12 箱分出土している。古代の須恵器と土師器を少し含むが、ほとんどが弥生時代後期から古墳時代初頭の土器である。主に在地系であるが外来系も少し含み、外来系のなかでは畿内系が多く山陰系が僅かにある。実測図は弥生土器と土師器に分けているが厳密に区分できないものもある。土器以外の出土遺物に丸瓦や平瓦、石斧や石包丁の破片などがある。

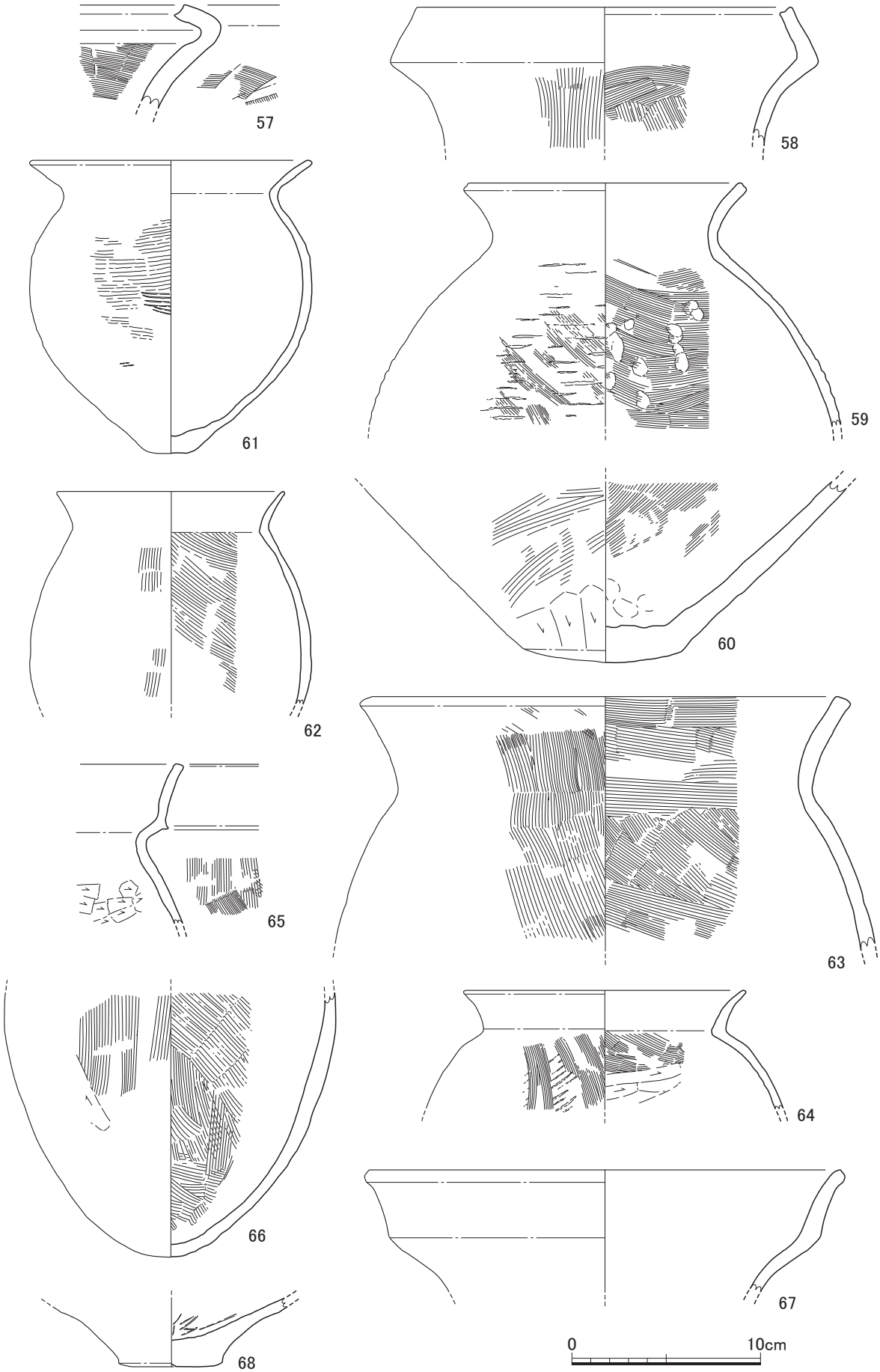
出土遺物（第 17・18 図、図版７・８）

弥生土器

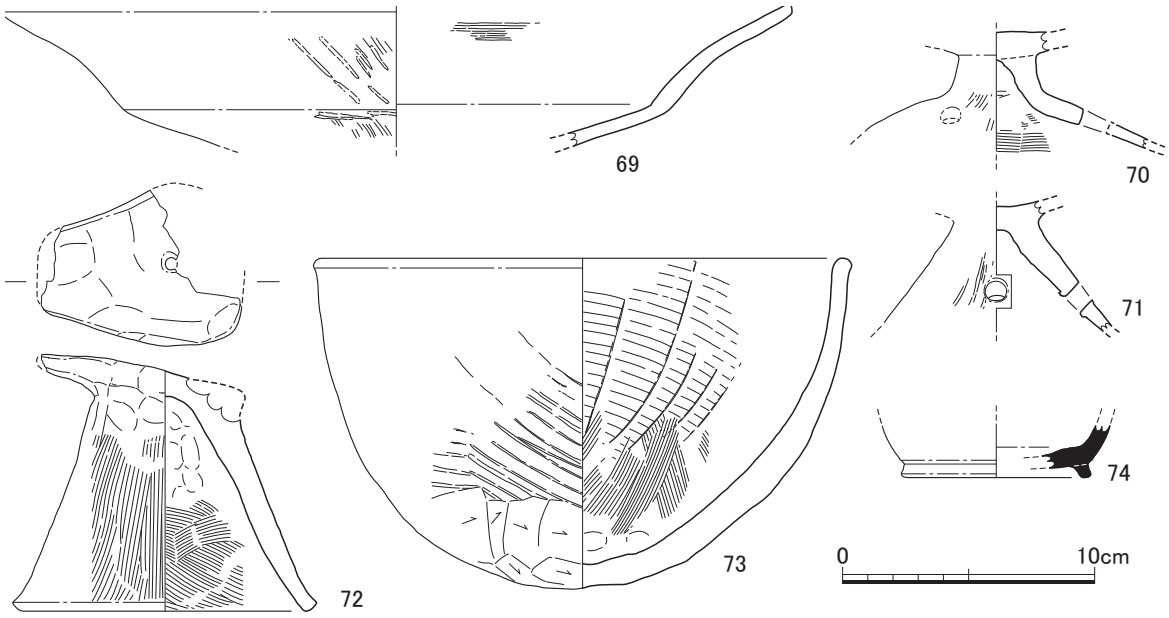
壺（57・58・59・60）　**57・58** は複合口縁壺の口縁部片である。**57** の口縁反転部の稜は緩いもので、端面はナデにより凹む。内外面ともに口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ調整である。**58** の口縁端面もナデにより凹む。内外面ともに口縁部はヨコナデ、頸部はハケメ調整であり、外面のハケメは口縁反転部の稜線までである。**59** の口縁部は外湾しながら立ち上がる。胴部外面は水平な平行タタキの後ハケメ、内面はハケメで指頭痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。**60** は凸レンズ状平底の底部である。調整は、底部外面がヘラケズリのち一部ナデで内面はユビオサエとナデ、胴部は内外面ともにハケメ後一部ナデている。

土師器

甕（61 ～ 66）　**61** は全体の 1/2 程度が残存する。肩がやや張る形で、口縁部はくの字に外反し、底部はごく小さな平底である。胴部上位から中位は水平かやや右上がりの平行タタキで、胴部下位は磨耗して不明瞭だが底部付近はヘラケズリ。口縁部から頸部の外面はヨコナデ調整である。内面は底部がナデと思われるが、磨耗気味で不明瞭である。**62** は胴部下位から底部を欠損するが長胴のものだと思われる。胴部は内外面ともにハケメ調整であるが、外面は磨耗によりハケメがあまり残らない。口縁部は磨耗のため不明瞭である。**63** は口縁部の外反が弱いものである。内外面ともにハケメ調整で、口縁端面と口縁部外面上部はヨコナデである。**64** は口縁から胴部上位までしか



第17図　SD15　出土遺物実測図①(1/3)



第18図　SD15　出土遺物実測図②(1/3)

残存しないが胴部が張る形だと思われる。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、胴部外面は右上がりの平行タタキの後タテ方向のハケメ、内面は頸部付近がハケメでそれ以下はヘラケズリであろうか。65 は二重口縁甕の口縁から胴部小片である。屈曲部の稜は突出して鋭い。胴部外面はハケメで内面はヘラケズリ、口縁から頸部は内外面ともにヨコナデ調整である。66 は胴部中位から底部が残存する長胴で丸底のものである。外面中位がハケメで下位はタテ方向のナデ、内面はハケメ調整である。67 は二重口縁壺の口縁部片である。内外面ともに磨耗するがナデ調整だと思われる。68 は壺の突出する底部である。内外面ともにナデ調整で、内面にはナデの始点の工具痕が反時計回りに残る。

高杯（69・70）　69 は杯部片である。屈曲部から口縁部まで緩やかに外湾する。調整は、外面がハケメの後ナナメ方向のヘラミガキ、内面は磨耗で不明瞭だが一部にハケメが残る。70 は杯部と脚裾部を欠損するが、杯部が椀形になるものであろう。円形の透かしが 4 箇所にある。脚部外面は磨耗するが部分的にハケメが残り、内面はハケメ調整である。

器台（71）　受部と裾端部は欠損する。円形の透かしが 4 箇所にある。外面は磨耗するがタテ方向のヘラミガキかもしれない。内面はナデ調整である。

支脚（72）　沓形支脚である。受部の一部と脚部を 1/3 程欠損する。調整は、脚部外面がハケメ、内面下位はハケメで上位はナデ。受部はナデで仕上げている。

鉢（73）　丸底の鉢である。全体の 3/4 程残存する。外面は左上がりの粗い平行タタキの後、底部はヘラケズリで上位から口縁端部までがナデ調整。内面は条痕幅の広いハケメの後、細かいハケメで、底部はナデ調整である。

須恵器

壺（74）　高台付きのものである。調整は、内面がナデ、胴部外面は回転ヘラケズリだと思われる。

他に図版写真のみ掲載した土器がある（図版８）。左側 2 点は外面に波状文を施している。左上

の土器は甕か壺の口縁部小片、左下は二重口縁壺の二次口縁の小破片で垂直に立ち上がるものと思われる。いずれも古墳時代初頭前後の時期であろう。右側は大型の甕の頸部から胴部の破片だと思われる。頸部の下位に竹管文を横一列に、その下に斜め下方からの刺突文を同じく横一列に施している。外来系の土器だと思われるが、系統や時期はわからない。

ＳＤ 16（第３図）

調査区の南西に位置する。北東から南西に延び、南西側でＳＫ 12 にぶつかるが切り合い関係になるか不明である。北東側の高まりは包含層の掘り残しかもしれない。幅は 33 ～ 40 ㎝、深さは最深 19 ㎝で、さらに落ち込む部分の床面からの深さは 23 ㎝である。遺物は出土していない。

ＳＤ 17（第３図）

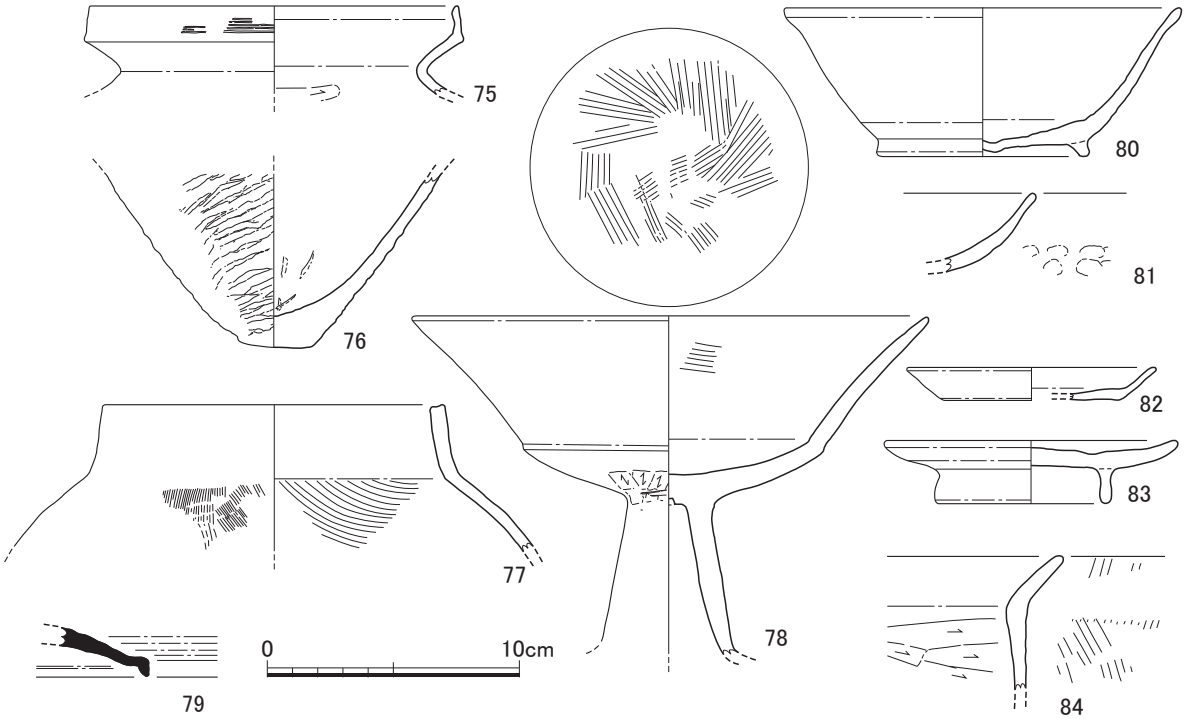
調査区の南東に位置する。北西から南東に延びＳＤ 15 にぶつかる。中央付近の高まりは包含層の掘り残しかもしれない。幅は 123 ～ 130 ㎝、深さは最深 17 ㎝である。遺物は出土していない。

ⅲ．包含層

遺物は整理箱 4 箱分出土している。土器には弥生時代後期から古墳時代初頭のもの、古代の須恵器と土師器があり、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器は、ほとんどが在地系で外来系は少ない。外来系では畿内系が多く、山陰系・吉備系が僅かにある。土器以外の出土遺物には古代の平瓦、安山岩製石鏃、穿孔のある扁平な石斧状の不明石製品片、鉄鏃片などがある。

出土遺物（第 19 図、図版８）

75 ～ **78** は古墳時代の土師器である。**75** は二重口縁の甕である。二次口縁の外面には櫛描平行線文を施す。調整は、胴部内面がヘラケズリで、それ以外はヨコナデである。**76** は小さな平底を持つ甕である。胴部外面は右上がりの平行タタキで、それ以外はナデ調整である。**77** は直口壺である。口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がり、端面はナデにより凹む。調整は、口縁部が内外面とも



第19図　包含層　出土遺物実測図(1/3)

にヨコナデ、胴部は外面が細かいハケメで内面は粗いハケメである。78 は高杯で、脚裾部の全てと口縁部の一部を欠損する以外はほぼ残存する。杯底部はやや内湾して斜め上方に立ち上がり、体部との境には段がつく。そこから口縁部にかけては、やや外湾しながら外に開き、脚柱部は直線的にハの字状に開く。調整は、杯底部外面がヘラケズリ、杯体部外面と口縁部の内外面はヨコナデ、杯体部内面はハケメである。脚柱部は外面がヨコナデ、内面は磨耗により不明瞭。脚柱部内面以外に赤色顔料を塗布するがほとんど剥落している。

79 は須恵器の杯蓋である。口縁端部の断面形は三角形で、内外面ともに回転ナデ調整である。

80 ～ 84 は古代の土師器である。80 は椀である。高台は底部の外端につき、口縁部はやや外反する。調整は、体部外面がヨコナデ、内面は磨耗で不明瞭。底部内面は不定方向ナデ。底部の切りはなしはヘラ切りで、その後ナデ。81 は丸底杯である。外面は底部より上位に指頭痕が残り、口縁から体部がヨコナデ。内面はミガキ調整である。82 は小皿である。底部内面は不定方向のナデ、体部は内外面ともにヨコナデ調整である。底部の切りはなしは回転ヘラ切りで、板状圧痕がある。83 は高台付きの小皿である。体部は内外面ともにヨコナデ、底部は内面が不定方向のナデ、外面がナデ調整である。84 は甕の小破片である。体部内面はヘラケズリで外面はハケメ。口縁部は外面がハケメ後ナデで、内面がナデ調整だと思われる。

他に図版写真のみ掲載した土器がある（図版８）。須恵器の甕の口縁部小片である。外面に珍しい波状文を施しているため掲載した。

村下遺跡Ｃ地点出土の土器に付着する赤色顔料について

志賀智史（九州国立博物館 博物館科学科）

1. はじめに

福岡県大野城市筒井に所在する村下遺跡Ｃ地点から出土した弥生時代後期の土器（第４図）に付着する赤色顔料について、その種類を知るために顕微鏡観察、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線回折をおこなった。

現在までの調査によって、古墳時代以前の出土赤色顔料は水銀を主成分とする朱（HgS，鉱物名称：辰砂 cinnabar）と、赤色の酸化鉄に発色の要因があるベンガラ（α-Fe203，鉱物名：赤鉄鉱 hematite 等）の二種類が知られている。

2. 調査方法

顕微鏡観察

赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料の混在状況、粒子形態の詳細等を知ることが目的である。実体顕微鏡（7-100 倍）では直接資料を観察した。朱はショッキングピンク色ーオレンジ色に見え、ベンガラであれば、暗赤色他に見える。生物顕微鏡（50-400 倍）では竹串で赤色部分をサンプリングし、複数枚のプレパラートを作成して観察した。朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に見え、ベンガラであれば、暗赤色他の粒子が見える。この判別にはある程度経験が必要であるが、特に微粒のものが混在していなければ、両者の区分は比較的容易に行うことができる。

蛍光Ｘ線分析

主成分元素を知ることが目的である。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 EDAX 社 EAGLE Ⅲ XXL（測定条件：測定範囲φ 0.1mm/ 電圧 40Kv/ 電流任意 / 時間 100 秒 / 大気）を用い資料を直接測定した。朱は水銀（Hg）が､ベンガラは鉄（Fe）が検出される。ただし鉄は土壌にも含まれているので、その由来は顕微鏡での観察結果と総合して判断した。

Ｘ線回折

主な鉱物組成を知ることが目的である。試料水平型Ｘ線回折装置リガク社製 RINT Ultima Ⅲ（測定条件：Ｘ線：Cu40kV40mA，ゴニオメータ：Ultima Ⅲ水平ゴニオメータ（D/tex-25），アタッチメント：標準資料ホルダー，フィルタ：不使用，インシデントモノクロ：使用，カウンタモノクロメータ：使用，発散スリット：1.0mm，発散縦制限スリット：5mm，散乱・受光スリット開放，第１・第２スリット：なし，入射･受光スリット：なし，カウンタ：シンチレーションカウンタ，走査モード：連続，スキャンスピード 2.0000°/min，サンプリング幅：0.0200°，走査軸：2θ / θ，走査範囲：3.0000 ー 90.000°，θオフセット：0.0000°，得られたデータを JADE6 と PDF2 でマチング）を用い、平行法で資料を直接測定した。

3. 調査結果とまとめ（第 20 ー 24 図）

土器外面はしっかり赤く（第 20 図）、胎土との色調の差も明瞭である（第 23 図）。赤色粒子の顕微鏡観察ではベンガラかと思われる暗赤色の非常に細かな粒子を認めた。蛍光Ｘ線分析では赤色に由来すると思われる成分として鉄を検出し、水銀は検出されなかった。Ｘ線回折では赤鉄鉱を

同定し、辰砂は認められなかった（第24図）。X線回折でのその他のピークは土器の胎土に由来するもの（石英等）と考えられる。以上のことから本資料の赤色顔料はベンガラと考えられる。

ベンガラは土器外面一面に認められる（第21図）。土器焼成前に空けられた穿孔内の外面側にも液垂れ状に認められる（第22図）。外面のベンガラは面的に広がり表面は比較的平滑で光沢が認められるが、穿孔内のベンガラは部分的で表面に凹凸がある。これらの状況から、土器焼成前に土器の外面にベンガラを塗布し、表面を研磨した後、焼成し固着させたものであろう。

一般的に土器に付着する赤色顔料は、土器焼成前に塗布されたものと、焼成後に付着・塗布されたものに分けられる。

土器焼成前に塗布されたものはいわゆる丹塗土器と呼ばれるもので、土器を焼く前に赤色顔料を塗布し、焼くことによって器面に固着させたものである。赤色顔料は器面にしっかりと付着しているものが多い。赤色顔料のうち朱は500度前後で昇華するため、焼成前に塗彩された赤色顔料は全てベンガラである。塗布箇所は壷や甕であれば底部を除く外面や口縁部内側、高杯であれば底部以外の全面と言ったように見える部分に限定される。

土器焼成後に付着・塗布されたものは、塗彩を目的とするものであれば漆や膠などの膠着剤に赤色顔料を混ぜて塗布し器面に固着させたものである。膠着剤は有機物のため、残っていないことも多い。漆が残っていれば樹脂状光沢を持つしっかりした層が認められ、漆が残っていなければ器面に粉状に付着するものが多い。膠は漆よりも劣化速度が格段に早く、土中ではほぼ遺存しないため、その使用を特定することは困難である。

焼成後塗彩の赤色顔料は朱とベンガラの両者があって、朱かベンガラの単体もしくは両者の混ぜられたものが一回もしくは複数回塗布されている。塗彩以外にも貯蔵や運搬、赤色顔料を用いた祭祀（内面朱付着土器など（本田1994））に使用されたと思われるものも存在しているが、その区分は難しいものも多い。外面であれば塗彩を、内面であれば貯蔵や運搬、祭祀の用途と概ね考えてよいであろう。

本資料は土器焼成前のベンガラ塗彩土器、いわゆる丹塗土器と考えられる。

なお、ベンガラにはパイプ状ベンガラと呼ばれる直径1μmの円筒状粒子を含むベンガラがよく知られている。このパイプ状の粒子は湖沼に住む鉄細菌を焼成して得られたものであることが解っており（岡田1997)、原料の採取された環境がある程度推定できる。近年、その使用には地域性が認められることが明らかになりつつある（志賀2008,2009等）。今回の資料にはこの粒子がまったく含まれていなかった。

〈参考文献〉

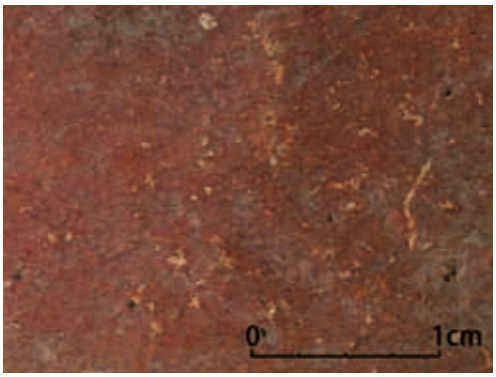
岡田文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会大14回大会要旨集』日本文化財科学会,38-39頁

志賀智史2008「前期前方後円（方）墳から出土するベンガラの地域性に関する研究」『日本文化財科学会 第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会,196-197頁

志賀智史2009「奥山古墳の赤色顔料について」『薩摩加世田 奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館,56-59頁

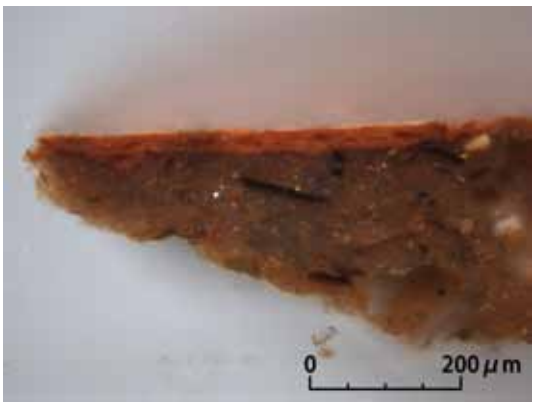
本田光子1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ,1-8頁

第20図　調査資料の内外面。外面は暗赤色で、内面に比べ明らかに赤い。(通常光,1/2倍)

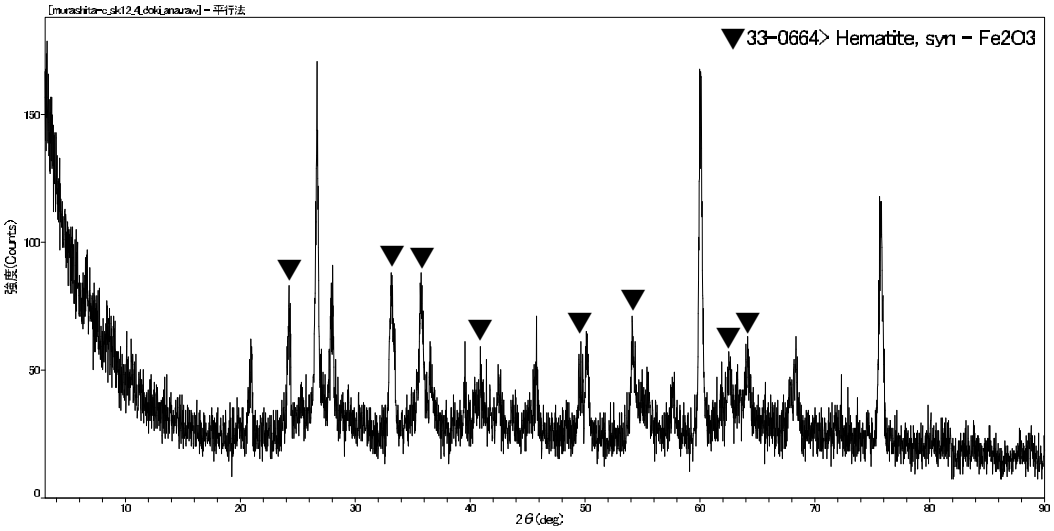


第21図　外面。暗赤色層(ベンガラ層)が面的に広がり、所々剥げたところから黄褐色の土器胎土が見える。(側射光,2.5倍)

第22図　焼成前穿孔内のベンガラ付着状況。左が外面側。液垂れ状に付着する。(側射光,5倍)



第23図　外面のベンガラ層断面。ベンガラ層は25μm前後の厚さである。胎土中に点々と認められる赤色の斑点はベンガラではなく通常よくある赤色の酸化鉄粒であろう。(側射光,100倍)



第24図　資料のX線回折図。赤鉄鉱(Hematite)が同定された。その他のピークは石英などの土器に含まれる鉱物であろう。

表１　出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量（cm・g）①口径②器高③底径④最大径（復元）	形態･技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
0001	土師器	甕	SK-12	SK12	①(14.0) ②12.3+α	外面は口縁部～肩部にヨコナデ、胴部にヘラ削り後ハケメ。内面は口縁部にハケメ、胴部に指頭圧痕・ナデ。	A：精良、0.5～2mm程の長石・石英、微細な雲母片を少量含む。 B:良好。 C:外浅黄橙7.5YR8/3～黒褐7.5YR3/2、内褐灰7.5YR4/1。	
0002	土師器	鉢	SK-12	SK12	①(13.0) ②6.4	口縁部内外面はハケメ。外面は口縁部～底部にヘラミガキ。内面は胴部上位に指頭圧痕、胴部下位～底部にナデ。	A：精良、1～2.5mm程の長石、微細な雲母若干含む。 B:良好。 C:内外共に橙5YR6/8、外底部浅黄橙7.5YR8/3～灰N6/0。	内外面とも器表面剥離有り。
0003	土師器	高杯	SK-12	SK12	②8.6+α	外面は杯部にナデ、脚部外面に縦方向のナデ、下位に横方向のナデ。内面は杯部にミガキ？、脚部上位は削り、下位はナデ。	A：0.5～2.5mm程の長石・石英を多めに含む。 B：良好。 C：内外共に浅黄橙7.5YR8/6～橙7.5YR7/6。	
0004	土師器	高杯？	SK-12	SK12	②4.65+α	外面は脚端部にナデ。内面は中位～下位にハケメ。	A：やや粗い、0.5～1.5mm程の微細な雲母を含む。 B:良好。 C:外赤褐5YR4/6～黒褐5YR3/1、内橙5YR6/6。	脚部に円形透かし、外面赤色顔料の塗り。
0005	土師器	器台	SK-12	SK12	②14.8+α	外面は脚部に粗いハケメ。内面は脚部上位にヘラ削り、下位にナデ、口縁内部にハケメ。	A：粗い、1～3mm程の石英・長石、微細な雲母片を多量に含む。 B：良好。C：内外共に橙7.5YR7/6～6/6。	
0006	土師器	甕	SK-13	SK13	②8.7+α	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内外面はハケメ。	A：0.5～1.5mm程の長石・石英を多く含む。 B：良好。 C：外橙5YR6/6～灰褐5YR4/2、内にぶい黄橙10YR7/4。	胴部に黒斑か？
0007	土師器	壺	SK-13	SK13	②7.25+α ④10.0	胴部上位は外面はハケメ後ナデ？内面はナデ、下位～底部外面はヘラ削り、内面はハケメ。円形の穿孔有り。	A：精良、0.5～1mm程の長石を若干含む。 B：やや良好。 C：外にぶい黄橙10YR7/3～褐灰10YR4/1。	胴囲下部は磨耗気味。外面に黒斑あり。
0008	土師器	壺	SK-13	SK13	①(12.9) ②9.8+α	口縁端部内外面はヨコナデ。外面は口縁部中位～胴部に粗いハケメ。内面は口縁部にハケメ、頸部にナデ、胴部にハケメ後一部縦方向のナデ。	A:0.5～2.5mmの長石･石英を多めに含む。 B:良好。C：内外にぶい黄橙10YR7/3。	内面に器面剥離有り。
0009	土師器	壺	SK-13	SK13	①(11.3) ②17.1+α	外面は口縁部にヨコナデ、胴部はハケメ上位にミガキ、胴部下位にヘラ削り、口縁部に暗文有り。内面は胴部にハケメ。内面の口縁部・胴部中位は磨耗により調整不明。	A：良、0.5～1.5mm程の微細な雲母片を少量含む。 B：やや不良。 C：外明赤褐5YR5/6（丹塗？）、内橙7.5YR7/6。	内外面とも円形状の剥離痕が多い。
0010	土師器	鉢	SK-13	SK13	①(27.1) ②13.5+α	内外面全面にハケメ。	A：粗い、0.5～2.5mm程の長石・石英を多く含む。 B：良好。 C：内外共に橙5YR6/8～浅黄橙7.5YR8/3。	
0011	土師器	台杯鉢	SK-13	SK13	②6.7+α ③(9.4)	外面は体部～脚部中位にハケメ。内面は体部にナデ。脚部下位外面・脚部内面は磨耗の為調整不明。	A：粗い、0.5～3mm程の長石･石英を多く含む。 B：やや不良。 C：内外共に橙5YR6/8。	全体的に磨耗気味。
0012	土師器	甑	SK-13	SK13	①14.9 ②11.0	外面は口縁部～胴部上位にナデ、胴部下位～底部にヘラ削り。内面は縦方向と斜方向のナデ。	A：0.5～3mm程の長石･石英、微細な雲母等片、角閃石を含む。 B：良好。C：内外共に赤褐5YR4/6～黒褐5YR2/1。	体部下位～底部に黒斑。
0013	土師器	器台	SK-13	SK13	②14.2+α	口縁部内外面はハケメ。脚部中位～下位内外面はナデ。下位内面にハケメ。	A：0.5～3mm程の長石･石英を多めに含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR7/4　明黄褐10YR7/6、内にぶい黄橙10YR7/4。	脚部は粗い面取り行っている。
0014	土師器？	器種不明	SK-13	SK13	②4.4+α	内外面にナデ。外面をミガキ？鋸歯文等の線刻有り。	A：精良、微細な雲母片、0.5mm程の石英、角閃石を含む。 B：良好。 C：外灰黄褐10YR4/2、内にぶい黄橙10YR6/3～灰黄褐10YR5/2。	搬入と思われる。
0015	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(30.0) ②12.65+α	口縁部上位内外面はヨコナデ。口縁部中位～胴部内外面はハケメ。頸部外面に突帯貼付。	A：粗い、0.5～2.5mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:外にぶい黄橙10YR7/4、内灰黄褐10YR6/2。	
0016	弥生土器	甕	SK-16	SK16	①(47.8) ②19.7+α	口縁部外面はハケメ、内面はハケメの後ナデ。胴部内外面にハケメ。内面はハケメの後一部ナデ。頸部外面に突帯貼付。	A：１～2mm程の長石をやや多く含む、微細な雲母片をごく少量含む。 B：良好。C:外にぶい黄橙10YR6/4、内にぶい黄橙10YR6/4一部明褐7.5YR5/6～褐灰7.5YR5/1。	
0017	弥生土器	壺	SK-16	SK16	②27.0+α ④胴部(26.0)	頸部内外面はハケメ、胴部外面は上位にハケメ中位以下はミガキ、内面上位はナデ、下位はハケメ。頸部外面に突帯貼付。	A：やや粗い、1～3mm程の石英・長石粒を多く含む。 B：良好。 C:外橙7.5YR6/6～明褐7.5YR5/6、内明褐7.5YR5/6。	胴部に黒斑あり。

表１　出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量（cm・g）①口径②器高③底径④最大径（復元）	形態･技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
0018	弥生土器	壺	SK-16	SK16	①(17.4) ②10.8+α	口縁部内外面はナデ。胴部外面はハケメ、内面は工具を使用したナデ。	A：やや粗い、0.5～2mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:外にぶい黄橙10YR7/3～灰黄褐10YR4/2、一部黒10YR2/1、内にぶい黄橙10YR7/3～灰黄褐10YR5/2。	口縁部に黒斑あり。
0019	弥生土器	壺	SK-16	SK16	②6.1+α ④口縁部(17.2)	口縁部外面はナデ、工具のあたり有り。内面上位はナデ、下位はハケメ。	A：粗い、0.5～2mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:外浅黄橙7.5YR8/4、内にぶい橙7.5YR7/4。	
0020	弥生土器	壺	SK-16	SK16	②5.0+α ③8.4	胴部外面はナデ、内面はハケメ。	A：やや粗い、0.5～3mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:内外共に明黄褐10YR7/6。	砂粒を多く混入。
0021	弥生土器	鉢	SK-16	SK16	①(10.5) ②6.7	外面は口縁部～胴部にナデ、底部にヘラ状のものでナデ？内面は胴部～底部に指頭圧痕・ナデ。	A：精良、0.5～2.5mm程の長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:外にぶい黄橙10YR7/2～黒10YR1.7/1、内明黄褐10YR7/6～黒褐10YR3/2	手捏ねによる製作。 底部に煤付着。
0022	弥生土器	高杯	SK-16	SK16	②4.4+α	口縁から体部内外面にハケメの上から暗文。一部磨耗明。	A：精良、0.5～2.5mm程の長石、微細な金雲母を含む。 B：良好。 C:内外共に橙5YR6/6。	
0023	弥生土器	高杯	SK-16	SK16	②11.0+α	外面はミガキ、ミガキの下にハケメ。内面はナデ？、下位に横方向のハケメ。円形の透かし有り。	A：精良、0.5～3mm程の長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:内外共に橙2.5YR6/8。	脚部の円形透かしは４ヶ所。
0024	弥生土器	高杯	SK-16	SK16	②6.75+α ③(18.8)	外面はミガキ、ミガキの下に工具のあたり、最下位にハケメ。内面はハケメ、上位にナデ。円形の透かし有り。	A：精良、微細な金雲母片0.5～2mm程の長石・石英を含む。 B：良好。 C:外にぶい橙7.5YR6/4～灰褐7.5YR4/2、内にぶい橙7.5YR6/4。	
0025	土師器	沓形支脚	SK-16	SK16	①6.3 ②4.3+α	頭部に平行タタキ。脚部外面は上位に指押さえナデ、中位～下位にハケメ。内面はナデ。	A：粗い、0.5～2.5mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:内外共に橙5YR6/6～明褐灰7.5YR7/2。	
0026	土師器	支脚	SK-16	SK16	②8.4+α ③10.9	内外面ともナデ。	A：粗い、0.5～3mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:外にぶい橙5YR6/4～にぶい褐7.5YR6/3、内橙5YR6/6。	
0027	土製品	土製柄杓	SK-16	SK16	長7.1　幅6.0 高3.6	全面にナデ。	A：やや粗い、0.5～2.5mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C:内外共に橙5YR7/6。	
0028	石製品	砥石	SK-16	SK16	長36.0 幅20.1 厚10.0 重量12.1kｇ	３面に擦痕有り。		砂岩製。
0029	須恵器	杯	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	①(18.2) ②7.1 高台径(9.8)	口縁部内外面は回転ナデ。外面体部下位から底部に回転ヘラ削り、底部内面に不定方向のナデ。高台接地面に板状圧痕有り。	A：精良、1～5mm程の白色礫を数粒、1～2mm程の長石を多く含む。 B：良好。 C:内外共に青灰5B5/1、高台部分のみ明青灰5B7/1。	還元良好。
0030	土師器	杯	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	①(16.0) ②6.4 高台径8.9	口縁部は内外面ヨコナデ。胴部内外面はミガキ、底部外面は回転ヘラキリ後ナデ。高台が付く。	A：精良、1mm程の長石粒を少量含む、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C:内外共に橙7.5YR6/6。	
0031	土師器	杯	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	①(14.7) ②3.2 ③(7.4)	口縁部はヨコナデ。体部外面はミガキ、内面はヨコナデ後ミガキ。底部外面から体部下位まで回転ヘラ削り。	A：1mm程の長石、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C:内外共に橙7.5YR6/6。	
0032	土師器	杯	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	①(14.0) ②3.35 ③(9.4)	体部内外面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラ切り、板状圧痕有り。	A：1～5mm程の白色砂礫をやや多く含む、1mm程の長石、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C:外橙7.5YR6/6、内橙7.5YR6/6一部褐7.5YR4/6。	
0033	土師器	丸底杯	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	②2.9+α	口縁部は内外面ヨコナデ。体部外面にナデ。内面はミガキ。外面下位に不明瞭な指押え有り。	A：1～5mm程の石英・長石の砂礫をやや多く含む、1mm程の石英・長石の砂粒を少量含む。 B：良好。 C:内外共に浅黄橙10YR8/4。	
0034	土師器	甕	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	②6.7+α	口縁部は外面はヨコナデ、内面はハケメ。胴部は外面にハケメ、内面はヘラ削り。	A:やや粗い、1～4mm程の白色礫・1mm程の長石を多く含む、1mm程の雲母を少量含む。 B:良好。 C:内外共に明褐7.5YR5/6。	外部下部に煤の付着あり。

表１　出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量（cm・g）①口径②器高③底径④最大径（復元）	形態･技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
0035	瓦	平瓦	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	長15.4+α 幅9.7+α 厚2.2	凸面は縄目叩き、凹面に布目痕有り。側面はヘラ削り。縄目叩きの一部は消えかかっている。（ナデか？）	A：1～5mm程の白色砂礫を多く含む、1mm程の長石を多く含む。 B：良好。 C:凹面（布目）灰黄2.5Y6/2、凸面（縄目）黄灰2.5Y5/1、断面中央部（胎土芯）灰N4/。	還元やや不良。
0036	石製品	不明製品	SD-1 Ⅰ層	SD01　Ⅰ層	長7.6 幅4.2 厚1.5 重量67.3ｇ	表側に巾1mm程度の条痕有り。溝は1部は直線で他はカーブしている。裏面に打痕有り。裏面から側面は平滑である。		石材不明。
0037	須恵器	杯蓋	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(15.0) ②1.8+α	口縁部内外面を回転ナデ。体部内面をナデ、外面はヘラ削りする。	A：精良、1mm程の長石を少量含む。 B：良好。 C：外青灰5B6/1、内オリーブ灰2.5Y6/1。	還元良好。
0038	須恵器	壺蓋？	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	②1.8+α	摘み部は回転ナデ。蓋天井部は回転ヘラ削り、内面はナデ。	A：精良、1～2mm程の長石粒をやや多く含む。 B：良好。 C：外暗紫灰5P4/1 断面は青灰5B6/1、内暗赤灰5R4/1。	天井部にヘラ記号か？ 還元良好。
0039	須恵器？	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①13.0 ②3.8 ③8.4	内外面回転ナデ。底部内面は磨耗。底部は回転ヘラ切り後ナデ。板状圧痕有り。	A:1～2mm程の長石・石英粒をやや多く含む、微細な雲母片をやや多く含む。 B:良好。 C:外明褐7.5YR5/6～橙7.5YR6/6、内明褐7.5YR5/6。	
0040	須恵器？	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①14.0 ②4.8 ③8.3	内外面回転ナデ。底部内面はナデ。底部外面は回転ヘラキリ後ナデ。板状圧痕有り。	A:1～2mm程の長石粒を少量含む、微細な雲母片をやや多く含む。 B:良好。 C：外橙7.5YR6/6、一部浅黄2.5Y7/3～黒褐2.5Y3/1、内橙7.5YR6/6、一部浅黄2.5Y7/3。	内底部に2本の線刻あり。
0041	須恵器	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①13.7 ②3.7 高台径8.9	口縁から体部内外面を回転ナデ。底部内面を不定方向ナデ、底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。高台が付く。	A：精良、1～3mm程の長石粒をやや多く含む。 B：良好。 C：外灰N5/ 、内灰N6/。	還元良好。埋没土の影響で内面に茶褐の付着物あり。
0042	須恵器	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(18.8) ②5.1 高台径（12.6）	口縁から体部内外面を回転ナデ。底部内面を不定方向ナデ、底部外面は回転ヘラ削り。高台が付く。	A：精良、1～2mm程の長石粒を少量含む。 B：良好。 C：外灰5N6/、内灰N6/。	還元良好。
0043	須恵器	皿	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	②1.8+α	内外面回転ナデ。底部内面はナデ。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。板状圧痕有り。	A:1mm程の長石粒を少量含む、微細な雲母片を少量含む。 B:良好。 C:外にぶい橙7.5YR6/4、内にぶい褐7.5YR5/3～口縁部褐灰7.5YR4/1。	
0044	須恵器	横瓶？	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①9.5 ②4.4+α	口縁部内外面は回転ナデ。肩部に格子叩きを行い、体部内面に同心円状の当て具痕。	A：精良、1mm程の長石粒を少量含む。 B：良好。 C：内外共に青灰5B5/1 断面の一部暗紫灰5RP4/1。	還元良好。
0045	須恵器	短頸壺	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(13.0) ②3.3+α	口縁部と体部内面は回転ナデ。体部外面は回転ヘラ削り。	A：精良、1～2mm程の長石粒を少量含む。 B：良好。 C：外黄灰2.5Y6/1～2.5Y4/1、内灰白2.5Y7/1。	瓦質。
0046	須恵器	盤	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(34.4) ②5.9+α	口縁から体部内外面を回転ナデ。底部内面をナデ、体部外面下位を回転ヘラ削りする。高台が付く。	A：精良、1～2mm程の長石・石英粒をやや多く含む。 B：良好。 C：外灰白2.5Ｙ7/1、内灰黄2.5Ｙ7/2。	瓦質。
0047	土師器	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(14.2) ②3.3 ③6.7	内外面ともヘラミガキ。底部外面から体部下位まで回転ヘラ削り。	A:1～2mm程の長石･石英の粒を多く含む、微細な雲母片を少量含む。 B:良好。C：外橙7.5YR6/6、内明褐7.5YR5/6。	灯明皿 口縁部の内外面に煤が付着。
0048	土師器	杯	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①16.3 ②3.6 ③8.2	内外面ともヘラミガキ。底部外面から体部下位まで回転ヘラ削り。	A:1～2mm程の長石粒をやや多く含む、微細な雲母片を多く含む。 B:良好。 C:外橙7.5YR6/6、内明褐7.5YR5/6。	灯明皿 口縁部2ヵ所と内底部に煤が付着。
0049	土師器	甕	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(29.0) ②9.7	口縁部内外面はハケメ。体部内面はヘラ削り。外面はハケメ。	A：やや粗い、1～3mm程の長石･石英粒を多く含む。 B：良好。 C：外橙7.5YR6/6、口縁部の一部黒褐7.5YR3/1、内にぶい黄橙10YR6/4～口縁部暗褐10YR3/3。	
0050	土師器	甕	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	②9.1+α	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面はヘラ削り、外面はハケメ。口縁と胴部の境はナデ。	A：やや粗い、1～3mm程の長石・石英の粒を多く含む。 B：良好。 C：外浅黄橙10YR8/4、内にぶい黄橙10YR7/3。	胴部外面に黒斑あり。
0051	土師器	鉢	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	①(8.8) ②8.7	口縁部はナデ。体部内外面はナデ。	A：精良、1mm程の長石粒を少量含む、微細な雲母片を少量含む。 B：良好 C：外にぶい褐7.5.YR5/4～黒褐7.5YR3/2、内明褐7.5YR5/6。	取手の剥落痕がある。

表１　出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量（cm・g）①口径②器高③底径④最大径（復元）	形態･技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
0052	土師器	カマド	SD-1 Ⅱ層	SD01　Ⅱ層	長13.9 幅7.2 厚7.8	庇は内外面ハケメ調整する。カマド体部内面はヘラ削りを行う。庇との接合部はナデ。	A：やや粗い、1～3mm程の長石・石英粒を多く含む、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：明赤褐5YR5/6 内面とひさしの内面は煤により黒褐5YR3/1。	
0053	土師器	甕	SD-2	SD02	②8.7+α	口縁部内面はハケメ。胴部内面はヘラ削り、外面は胴部上位に叩き、下位はハケメ。	A：1mm程の長石粒をやや多く含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR6/4～灰黄褐10YR4/2、内灰黄褐10YR6/2。	胴下部に煤の付着か？
0054	土師器	甕	SD-2	SD02	②3.0+α	口縁部内面はハケメ、外面はヨコナデ。胴部内面はヘラ削り、外面はハケメ。	A：1mm程の長石粒をやや多く含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR7/4 、内にぶい黄橙10YR7/4。	外面の一部煤の付着により黒褐色。
0055	土師器	台付鉢	SD-7	SD07	②4.0+α	体部内面はミガキ？外面はハケメを行った後ミガキ？。脚部内外面は磨耗しているが、外面はミガキか？	A：1mm程の長石粒をやや多く含む。 B：良好。 C：内外共ににぶい橙7.5YR6/4。	
0056	須恵器	高杯	SX-2	SD09～14	②1.55+α	口縁から体部内外面とも回転ナデ。	A：精良、0.5～1.5mm程の長石を含む。 B：良好。 C：内外共に灰N6/。	還元良好。
0057	弥生土器	壺	SX-4	SD15	②5.5+α	口縁部内外面ともハケメ。口縁部上位はヨコナデ。	A：粗い、1～3mm程の石英・長石粒を多く含む。 B：良好。 C：外にぶい褐7.5YR5/4～にぶい黄橙10YR6/3一部褐灰10YR5/1、内明褐7.5YR5/6。	
0058	弥生土器	壺	SX-4	SD15	①(19.9) ②7.4+α	口縁部上位は内外面ヨコナデ。下位は内外面ともハケメ。	A：粗い、0.5～2mm程の長石・石英、微細な雲母片を多めに含む。 B：良好。 C：内外共に明赤褐2.5YR5/6。	
0059	土師器	甕	SX-4	SD15	①(15.0) ②12.9+α	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面はハケメ、下に指頭圧痕有り。胴部外面は平行叩き後ハケメ。	A：粗い、0.5～2mm程の石英・長石、微細な雲母片を多く含む。 B：良好。 C：内外共に橙5YR6/6。	
0060	弥生土器	壺	SX-4	SD15	②9.6+α ③8.4	胴部下位内外面ともハケメ後一部ナデ。底部付近は外面はヘラ削り。底部内面はナデ。	A：粗い、1～4mm程の長石・石英粒を多く含む。 B：良好。 C：内外共ににぶい黄橙10ＹR7/4、断面は褐灰10YR5/1。	胴部下位に黒斑あり。
0061	土師器	甕	SX-4	SD15	①(15.0) ②15.6 ③2.6	内面は口縁から胴部は磨耗、底部はナデ。外面は口縁はヨコナデ、胴部上位から中位は平行叩き、下位はヘラ削り。	A：粗い、1～3mm程の長石粒を多く含む、内面に1～5mm程の礫が見られる。 B：良好。 C：外橙7.5YR6/6～明赤褐5YR5/6、内橙7.5YR6/6。	底部から胴部下位の一部黒色化。
0062	土師器	甕	SX-4	SD15	①(12.0) ②11.3+α	口縁部内外面とも磨耗。胴部内外面ともハケメ。	A：精良、0.5～1.5mm程の長石・石英、角閃石を含む。 B：良好。 C：外明赤褐5YR5/6～橙5YR6/6～灰褐5YR4/2、内明赤褐5YR5/6～にぶい橙7.5YR5/4。	
0063	土師器	甕	SX-4	SD15	①(26.0) ②13.5+α	口縁部から胴部内外面ともハケメ。	A：やや粗い、0.5～1.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：内外共に浅黄橙10YR8/4。	
0064	土師器	甕	SX-4	SD15	①(15.0) ②6.3+α	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は上位にハケメ、中位はヘラ削りか？胴部外面は平行叩き後ハケメ。	A：良、0.5～3mm程の長石・石英、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR7/3、内にぶい黄橙10YR7/3～灰黄褐10YR6/2。	
0065	土師器	壺	SX-4	SD15	②8.3+α	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面上位はヨコナデ、中位はヘラ削り、外面はハケメ。	A：精良、0.5～1.5mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：外にぶい褐7.5YR5/4～灰褐7.5YR4/2、内明赤褐5YR5/6。	
0066	土師器	甕	SX-4	SD15	②14.0+α	胴部内外面ともハケメ。胴部外面下位は縦方向のナデ。	A：やや粗い、0.5～1.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：外灰褐7.5YR5/2、内橙7.5YR6/6～にぶい褐7.5YR5/4。	
0067	土師器	壺	SX-4	SD15	①(25.5) ②6.5+α	口縁部内外面ともナデか？	A：精良、0.5～1mm程の長石・石英、微細な雲母片を含む。 B：やや不良。 C：内外共ににぶい黄橙10YR7/3。	
0068	土師器	壺	SX-4	SD15	②3.7+α ③5.55	胴部内外面ともナデ。内面は放射状に工具の痕有り。	A：やや粗い、0.5～1.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：外にぶい橙7.5YR7/3～橙5YR6/6～暗灰N3/底部にぶい黄橙10YR7/2、内灰黄褐10YR6/2～褐灰10YR5/1。	

表１　出土遺物観察表⑤

遺物番号	種類	器種	出土地点	変更後の遺構番号	法量（cm・g）①口径②器高③底径④最大径（復元）	形態･技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
0069	土師器	高杯	SX-4	SD15	①(31.4) ②5.8+α	杯部口縁内面にハケメ、外面はハケメ後ミガキ。	A：やや粗い、0.5～2mm程の長石・石英を少量含む。 B：やや不良。 C：外にぶい黄橙10YR7/4、内にぶい黄橙10YR7/4～橙7.5YR6/6。	
0070	土師器	高杯	SX-4	SD15	②4.65+α	杯部内面は磨耗。脚部内外面にハケメ。	A：精良、0.5mm程の長石・石英を若干、微細な雲母片を含む。 B：やや不良。 C：内外共に橙7.5YR6/6。	円形の透かし有り4ヶ所か?
0071	土師器	器台？	SX-4	SD15	②5.2+α	杯部内面は磨耗。脚部内面はナデ、外面はミガキの痕跡有り。	A：やや良、0.5～4.5mm程の石英、0.5～1mm程の長石、微細な雲母片を多めに含む。 B：やや不良。 C：内外共に浅黄橙10YR8/4。	円形の透かしが４ヶ所。
0072	土師器？	支脚	SX-4	SD15	②10.2 ③裾部径12.0	頭部はナデ。脚部内外面とも上位にナデ、中位から下位はハケメ。	A：粗い、1～5mm程の石英・長石粒を多く含む。 B：良好。 C：内外共ににぶい褐7.5YR5/4。	
0073	土師器	鉢	SX-4	SD15	①(21.4) ②13.1	口縁から体部内面はハケメ、外面は上位は叩き後ナデ、下位はヘラ削り。	A：粗い、1～4mm程の石英・長石粒を多く含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR6/4～底部にぶい黄橙10YR7/3、内にぶい黄橙10YR7/3～一部黄灰2.5Y4/。	胴部下位に黒斑あり。
0074	須恵器	壺	SX-4	SD15	②2.1+α 高台径（7.5）	体部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ削り。高台が付く。	A：精良、0.5～1mm程の長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：内外共に灰N6/。	底部中央欠失。
0075	土師器	甕	SX-3	包含層	①(14.7) ②3.5+α	口縁部内面はヨコナデ、外面はヨコナデに櫛描平行線文。胴部内面はヘラ削り、外面はヨコナデ。	A：やや粗い、0.5～1mm程の長石、微細な雲母片を多めに含む。 B：良好。 C：外にぶい橙7.5YR6/4、内にぶい橙5YR6/4。	
0076	土師器	甕	SX-3	包含層	②6.9+α ③3.0	胴部下位外面は叩き、内面はナデ(工具のあたり有り)。	A：良、0.5～1mm程の長石、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：内外共ににぶい橙7.5YR7/4。	
0077	土師器	壺	SX-3	包含層	①(13.6) ②5.6+α	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部は内外面ともハケメ。	A：0.2～2mm程の長石・石英、微細な雲母片を少量含む。 B：良好。 C：外にぶい黄橙10YR7/4 、内にぶい黄橙10YR7/3。	口縁に褐色の付着物あり。
0078	土師器	高杯	SX-3	包含層	①20.5 ②13.5+α	杯部内面はハケメ、外面は口縁部をヨコナデ。体部下位をヘラ削り。脚部外面はヨコナデ、内面は磨耗。	A：やや粗い、0.5～1.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を多く含む。 B：やや不良。 C：内外共に橙5YR7/6～赤褐2.5YR4/8。	赤色顔料塗布。
0079	須恵器	杯蓋	SX-1	包含層	②1.9+α	口縁部内外面とも回転ナデ。	A：精良、0.5～2.5mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：内外共に灰N6/。	
0080	土師器	椀	SX-3	包含層	①（15.8） ②5.9 高台径8.4	口縁から体部外面はヨコナデ、内面は磨耗。底部内面をナデ。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ。高台が付く。	A：精良、0.5～2.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を含む。 B：やや不良。 C：外にぶい黄橙10YR7/3～橙5YR6/6、内にぶい黄橙10YR7/3。	器表面に小さな陥没が多い、混入砂粒の剥落によると思われる。
0081	土師器	丸底杯	SX-3	包含層	②3.15+α	口縁から体部内面はミガキ、外面はヨコナデ。体部外面下位に指頭圧痕有り。	A：精良、0.5～1.5mm程の長石・石英、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：外浅黄橙10YR8/3～褐灰10YR6/1、内浅黄橙10YR8/3。	
0082	土師器	高台付小皿	SX-1	包含層	①(10.0) ②1.35 ③(7.4)	口縁から体部内外面ともヨコナデ。底部内面をナデ。底部外面は回転ヘラ切り、板状圧痕有り。	A：精良、0.5～1mm程の長石・石英、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：内外共に灰白10YR8/2。	
0083	土師器	小皿	SX-1	包含層	①11.7 ②2.5 高台径7.0	口縁から体部内外面はヨコナデ。底部内面は不定方向のナデ。底部外面をナデ。	A：精良、0.5～1mm程の石英・長石、微細な雲母片を含む。 B：良好。 C：内外共ににぶい橙7.5YR7/4～褐灰7.5YR4/1。	
0084	土師器	甕	SX-3	包含層	②5.3+α	口縁部内面はナデ？外面はハケメ。胴部内面はヘラ削り、外面はハケメ。	A：やや粗め、0.5～1mm程の石英、微細な雲母片を含む。 B：やや不良。 C：内外共に浅黄橙7.5YR8/4。	

Ⅳ．まとめ

村下遺跡Ｃ地点で検出された主な遺構には土坑や溝があるが、遺構の時期比定に関しては遺物の出土状況を示す資料が無いために消極的にならざるをえない。出土遺物の時期については本文中にも述べているが、図化遺物に補足説明を加え、多量にある未図化遺物にも簡単に触れながら遺物の時期についてまとめておく。

ＳＫ 12 出土土器は弥生土器を含まない古墳時代初頭のものとしてよいだろう。第４図１は畿内第Ｖ様式系の甕と思われ、胴部にタタキ目を残さない新しい傾向のもの、同２は口縁部高が体部高の 1/2 以下の高さの小型丸底の鉢である。未図化遺物に庄内か布留系の胴部小片で極めて薄い器壁のものがある。

ＳＫ 13 出土土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものとしてよいだろう。未図化土器には稜のあまい凸レンズ平底の底部片とやや尖り気味の丸底の底部片がある。高杯片には口縁部が杯底部の長さより短く、外湾するものや、杯部の屈曲角度が広く、立ち上がりの長いものがあり時期幅がある。第６図７の小型の壺の胴部には穿孔があり須恵器ハソウ模倣品かもしれないが、当該時期の須恵器や土師器などは遺跡全体をみても出土していないため可能性は低いだろう。同 14 の鋸歯文などを描く土器については常松幹雄氏が類例を報告されている。[注1]

ＳＫ 16 は弥生時代後期前半から古墳時代初頭のものとしてよいだろう。図化遺物のほとんどは弥生時代後期後半から終末のものとしてよいと思う。未図化土器には完全な平底と思われる底部小片や稜のはっきりした凸レンズ底の底部があり後期前半から中頃のものであろう。高杯には第９図 22 よりも口縁部が長く伸びるものがあり、これは古墳時代初頭に下らせてよいかもしれない。

ＳＤ 01 の埋土はⅠ層とⅡ層に分層されているが、どちらの層でも弥生時代後期から古墳時代初頭の土器と古代の土器が出土している。なかでも８Ｃ後半～９Ｃ前半の須恵器と土師器が比較的多く出土しているのだが、このこともⅠ層とⅡ層で変わらない。出土状況がわからないのではあるが、８Ｃ後半に掘削され９Ｃ前半頃に埋没したと考えてよいかもしれない。しかし、その場合問題になるのは第 12 図 33 の丸底杯である。この丸底杯は 11 Ｃ後半前後のものと思われ、他にも僅かながら丸底杯の破片がⅠ層とⅡ層ともに出土しており、調査時の混入などでなければ９Ｃ前半頃までに埋没したという推定は成り立たなくなる。

ＳＤ 02 出土土器は弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものとおもわれる。ほとんどが在地系土器の胴部片であるが庄内系甕の胴部片や布留系甕かもしれない胴部片を少し含む。未図化土器に稜のあまい凸レンズ状平底の底部がある。

ＳＤ 15 からは整理箱 12 箱分の遺物が出土しており遺物量は最も多い。古代の須恵器・土師器もあるが割合としては少なく、ほとんどが弥生時代後期前半から古墳時代初頭の土器であり、在地系土器が主体で外来系を少し含む。図化土器では第 17 図 61・64 が畿内第Ｖ様式系の甕であり、未図化土器には第Ｖ様式系・庄内系・布留系の全ての畿内系の甕がある。同 65 は山陰系の甕である。

包含層からは第 19 図 75 の吉備系の甕が出土している。

以上から調査地出土土器の時期の流れを追うと始まりは弥生時代後期前半からであり後期後半から出土量が増えはじめ、終末から古墳時代初頭（柳田康雄氏の編年案で３Ｃ末のⅡａ式あたりまで）[注2]に出土量のピークをむかえる。その後は400年以上の間をおき８Ｃ後半～９Ｃ前半頃の土器が出土し、その後も量は極めて少なくなるが11Ｃ後半頃まで確認できる。

大野城市内では本調査地より南東約1.5kmに所在する原の畑遺跡で古墳時代初頭の土師器がまとまって検出されている。その中で主な土器検出遺構には第２次調査の１号竪穴住居跡とＳＫ62・04・06があり、これらは同一地点の遺構ではほぼ同じ時期と考えられるのだが、ＳＫ02は在地系土器主体、１号竪穴住居跡とＳＫ05・06は外来系土器主体となっている。本調査地点では住居やまとまりのあるピット群は検出されていない。土坑や溝の残存状況からすれば、削平を考慮しても本来遺物出土時期の住居や倉庫などの施設は存在しなかったのかもしれない。またＳＤ01が区画溝だとすれば、何を区画するものだったのかが問題になる。周辺調査による解明が期待される。

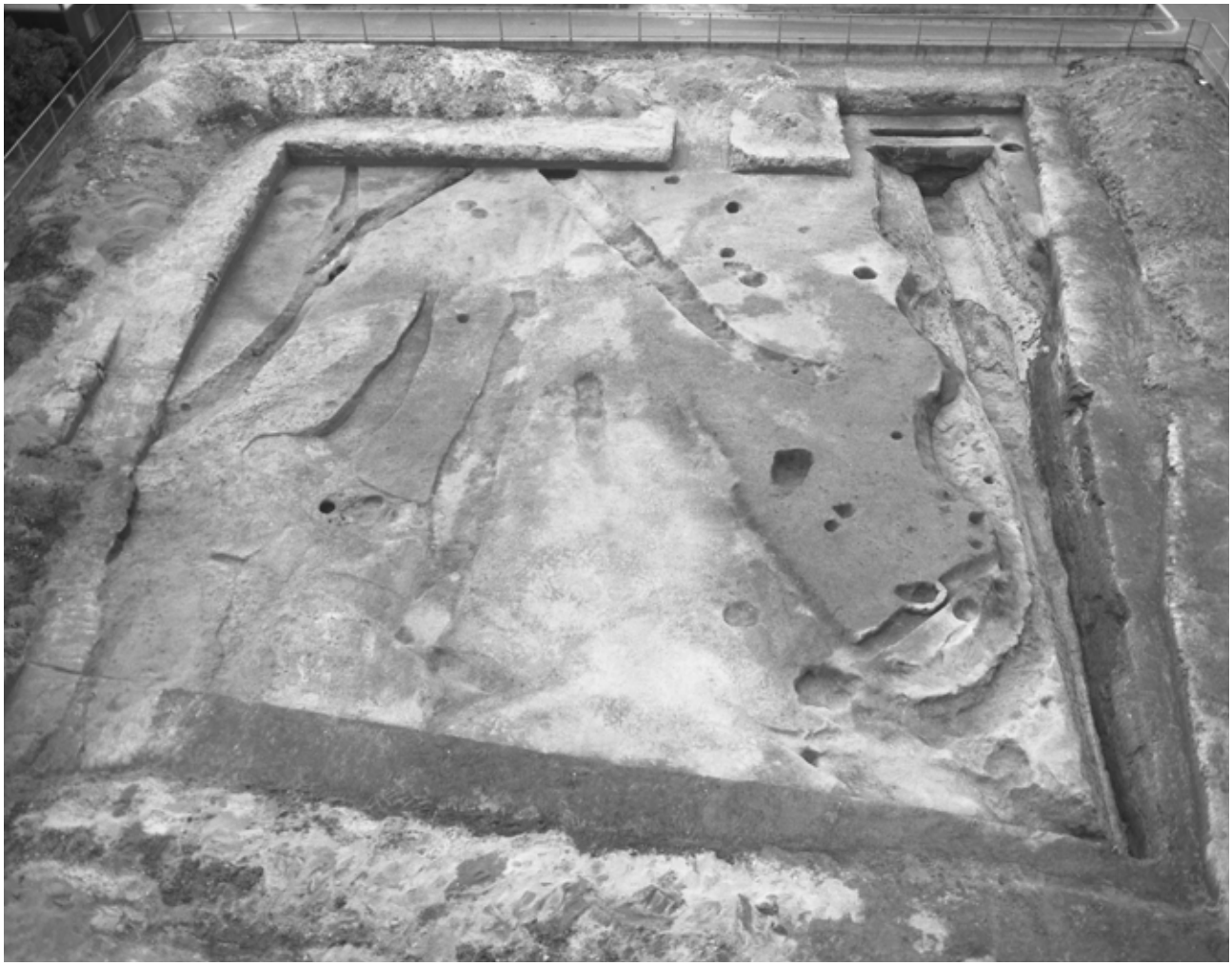
注１　常松幹雄「第１章　九州地方の土器」『考古資料大観』２　弥生古墳時代土器Ⅱ　赤塚次郎編　小学館2002

注２　柳田康雄「２土師器の編年」『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』1991

図　　版

※　遺物写真の番号は、挿図中の
遺物の番号と一致する。

（1）調査前 全景（東から）



（2）調査区北半（南東から）

図版 2

（1）SD 01　完掘状況（南東から）

（2）調査区南半（北西から）

（1）SD 01 北西部

（2）SD 01　土層

図版 4

（1）SK 13（北から）

（2）SK 15・16（右がSK 16）（西から）

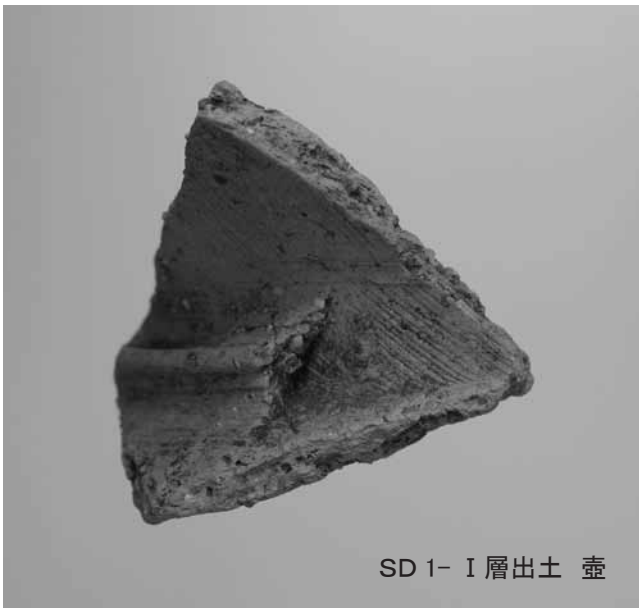
出土遺物①（1・2：SK 12、7～14：SK 13、16・17：SK 16）

図版 6

出土遺物②　（21 ～ 28 : SK 16、29・30 : SD 1- Ⅰ層、39 ～ 41 : SD 1- Ⅱ層）

出土遺物③　（48 ～ 52：SD 1- Ⅱ層、53：SD 2、60 ～ 73：SD 15）

図版 8


SD 1- Ⅰ層出土　壺

包含層出土　甕

SD 15 出土　土器片

出土遺物④　（78 ～ 83：包含層、SD 1- Ⅰ層出土　甕、SD 15 出土　甕、包含層出土　土器片）

報告書抄録

ふりがな	むらしたいせき
書名	村下遺跡Ⅱ
副書名	-C地点の調査-
巻次	Ⅱ
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第91集
編著者名	舟山良一、石川　健、森田レイ子
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510　福岡県大野城市曙町二丁目２番１号　　電話092（501）2211
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
むらしたいせき 村下遺跡 C地点	ふくおかけんおおのじょうしつつい 福岡県大野城市筒井１丁目498-2			33° 32′ 33″	130° 28′ 29″	1992.7月 ～ 9月	約600㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
村下遺跡 C地点	集落遺跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器 石製品	

要約	調査面積が約６００㎡で、検出遺構は土坑16基、溝17条である。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものと奈良時代から平安時代に属するものが中心であるが、11世紀後半までの遺物が確認できる。住居跡が確認できないことから、集落の中心部ではないが、比較的土器の出土が多いことから住居跡も周辺で発見されるのではないかと考えられる。弥生土器の赤色顔料について九州国立博物館志賀智史氏からベンガラとの分析結果をいただいた。

大野城市文化財調査報告書　第91集

村下遺跡Ⅱ

平成22年3月31日

発行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2－2－1

印刷　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5